

版權登錄

鹿兒島書肆

文舟堂發兌

薩摩錦

鶴陽蒲生清隆編輯

004462-000-3

特22-473

薩摩錦

蒲生 清隆 / 編

M26

ACE-0976



特22

473

陸摩訶錦

鶴陽蒲生清隆編輯



鹿兒島書肆

文舟堂發兌

序

九州々盡頭、古薩州は猶ほ今薩州なり、山秀水清の間自ら偉人を出せしこと寡からず、隼人の裔之れ紹くべきものあるか、この書は鶴陽蒲生子が、古薩州士人特偉の史蹟を蒐録して世に公梓するものなり、載籍徴すべく文辞亦た見るべし、後進の士是によりて忠順孝勇の迹を紹らば此

道更に近きにあるを知るべし、蓋し鶴嶺の秀、錦江の水、共に古薩州の風物、傳へて千秋の後にあり、後進の士、史蹟の紹くべきものあるを知りて可なり、來りて序を囑す乃ち書して之を與ふ、

明治癸巳初夏

麿城寓舍

北溟 川島 純 幹

緒 言

人誰が忠孝の志あからん、然とも言ふべくして行ひ難きもの、古今比々皆然り、古の大業を天下に立て芳名を竹帛に垂る、所以の者は、豈偶然ならんや、必ず盤根錯節の間志を立て望を懸けて、而して刻苦奮勵たるの結果たらずんばあらず、余常に謂へらく、往昔我國薩摩隼人の志士仁人、忠臣孝子輩出せしと雖も、多く未だ其偉功を世に公にせず、故に梓に上せし者稀なり、是れ余か殊に干戈の來歴、及び忠臣義士の功績を顯はさんか爲に、本書を編せし所以にして、之を名て薩摩錦と曰ふ、然とも之れ惟往古由來の概況を蒐録せしを以て、特に精覈ならざるのみならず、往々文辭の脩飾を爲さず、剩へ恣惚錯誤なきを保せず、識者幸に咎むる勿れ、

明治癸巳孟夏下浣

鶴陽 編者識

薩摩錦目次

- 一長壽院盛淳冒公諱并關原軍談
- 一川上久惟贈辭世歌於故郷
- 一大口壯士到山神之幽居
- 一町田存松謁太閤秀吉并察梅北矯命
- 一搏虎實錄并泗川大捷
- 一山田有信辭羽柴秀長賜天草并島津忠隣沒根白坂之陣
- 一濱田榮臨殉死遺誠子孫
- 一讀龍造寺隆信碑并島津家久援軍記事
- 一肥前島原出陣
- 一大玄公朝大家且親臨萬機
- 一伊集院俊雄進講并阿姊相良氏潛居
- 一孝子正右衛門
- 一義天公當正統定國家
- 一栗野磨欲踊

薩摩錦

蒲生清隆編輯

○長壽院盛淳冒公諱並關原軍談

古語曰眞澄鏡の
 仁愛み草薙劍の
 影に寫して照
 玉ふところ專
 遊戯の棄らるな
 天量とし
 從容として義に就て烹らるゝを嫉大節に臨て其志を奪ふべからざるも
 のあり我朝の楠中將宋の文天祥蓋其人なり記信か漢の高祖に代り村上
 義清の護良親王に死するが如き皆危きを見て命を授け難に靖んし國に

○長壽院盛淳冒公諱並關原軍談
 高明なるが如く照臨し眞赫玉の微妙なるが如く生民を
 相利なるが如く四方を撥鎮玉へと申ける上に立座在け
 ん止事なき御身は智勇仁愛の明德備らせ玉ふ中にも眞澄の鏡の妍媸を
 影に寫して照し玉ふところ專に之難有わざとぞ申おれされは朝に悪人の立なく野に
 遊戯の棄らるな天量とし治國の至要此數件には過ぎりけり抑又臣の君に於る
 從容として義に就て烹らるゝを嫉大節に臨て其志を奪ふべからざるも
 のあり我朝の楠中將宋の文天祥蓋其人なり記信か漢の高祖に代り村上
 義清の護良親王に死するが如き皆危きを見て命を授け難に靖んし國に

報ふ其他健將武夫の謀を善して敵を計り摧陷獲罪の功孟賁羽飛の勇歴
世比々として毛舉すべからず然と雖も多くは人主暗愚にして廟謨信用
せられず千載の下をして宜く其時の不幸を憾むるもの幾許ぞや惟みれ
ば本藩古來忠臣義士其門に輩出する固より代々其人に乏しからず島津
典廐の廻に陣没し島山盛淳關ヶ原に戰死す世以て美談とす而して典廐
は宗室の親臣にして盛淳と社稷の名臣なり其出處進退固より其分と雖
も淳の先君における先君の淳を知こと明なるに出たり初め先君淳を
圓首方袍の中より拔擢て即監臨の大任を授く而して宰相公關ヶ原の役
實に危急存亡の秋なり侯百里使を遣して我臣庶を喚に獨り手書して淳
を召す他人は則之を闕く此其倚重せらるるも亦知るべし淳果して忿々と
して日夜兼行僅に大軍將に擧らんするの前夜侯に見ことを得たり亦天
ある哉終に身を殺して國に當り君侯生平願託知己の恩に負かず是人主
其臣を知と明にして臣亦其君を相て不朽の忠勳を顯す所以なり吾聞く
長壽院盛淳は其父を島山中務少輔頼國と云ひ足利將軍天下の權を握る

や島山細川斯波を三管領職と号して幕府の政務を掌れり然るに享祿天
文の交に及て足利の武威漸く衰へ天下の諸侯互に奪攘呑吐す三好が黨
松永彈正と俱に謀叛を起し足利家拾貳代の將軍義輝を弑しまるらせけ
れは三管領も散々に式微て島山頼國之近衛殿下の御取持にて薩藩に下
向し三位義久侯に寄客とありて頗る田宅を賜りける頼國に一女一男あ
りしか熟々世の行末を顧るに我は元足利公室の重臣として時の不幸に
遇て遠く西海の浪に没落せり我か子孫をして永く卒伍の臣となさしめ
事二の辱を後業に貽さましかは何の面目あつてか祖宗に地下に見えん
や寧我子孫あらんに之如かして只管侯に請て田園家財を盡く阿多某
に譲り與へ一女一男共に出家させて自らは橋隱軒とを號れける一男は
大乘院主盛久法印か門に投して薩藩す即ち盛淳あり人となり純粹の性
を合て氣象甚だ雄偉たり故に浮屠の教を受くと雖も未だ曾て箕裘の業
を忘れず常に報國の志を抱けり年既に長して錫を上方飛し雲水の苦行
八年又高野に入て沐糧を修ると三年眞績功成て法賜を薩藩に旋し直に

護國山安養院に住持たらしめ給ふ法器大徳迪に緇素を提擧せしかは道象の撰範一山の光輝とぞ覺えける然るに三位侯數々盛淳を徹て政事を垂問し黒衣宰相の風あり遂に強て還俗せしめ即日國老職に拜せらる而して請に因て法号故の如し淳素より世事に委しく治體に達す且戰陣に臨み力戰數回鉄肥の伊東氏と闘ひ庄内の賊を討ち自ら敵首を斬と若干級就中豐太閤と和平成て淳棹して千代川を渉る時に敵中に人ありて曰薩人負軍して降參に出るの見苦しさと嘲り笑ふ淳大に怒り舟中の槳を横へ舷に立て曰夫軍の勝敗は兵家の常あり今汝か曹人の驥尾に附て虎威を假の賊なり今一度面を出して我に勝負を試よと呼りける其勢ひ決然として犯すべからず敵中肅然となりて復一言を發するものなし此日君侯泰平寺入て豐太閤を見給ふに淳亦從て太閤に相見すかくて慶長に至り大阪方と江戸表確執に及びて關西關東の諸侯双方に立分れしかは天下兩分の合戦あるべしとて國國の軍馬東西に奔走し各辨嚴の外他事をし此時宰相公上方に座在して盛淳に早々罷登るべしと馬遞をもて

召れけり盛淳命を請て其妻に告て曰予此行や再び汝を見し予陣没すと聞ば大興寺彌陀像をもて予か傳神とせよと云ひかきぬ當時の采邑蒲生郷の兵七十餘人を引卒し八月上旬先つ山川の津まで乗出たるに惡風船を漂して甲冑悉く濡れしかは暫く爰に滞在し中國の沖中に到れ之順風なきか上海上所々關を設て往來を差塞げり盛淳は舟子共に晝夜六七度の餉糧を食せ柁も櫂權も摧よとぞ漕せける九月某の日攝州兵庫の津に押渡りける候は先達て濃州へ出陣し給ふと承り兵庫由緒の商に寡君若軍利なくして此地に來り給ん時と善きに計ひ得させよとて數多の金子を與へ未然を謀置けりこの商家と淳か同家にて小豆屋某とて後に侯を迎ひまゐらせしも淳の功とぞ聞えし淳は片時も急ぐ道なれども中途は敵兵路を塞きて容易通り得す小早川隆景に行逢たり盛淳に向ひ御邊は島津殿の御内とぞ見請たりいざ打列れて參らんと詞をかけられ盛淳對て我未だ中國衆の檢先を存せねは覺束なく存する程に同道は斷なりと引離れてぞ打せける盛淳士卒に下知しけるは筒様の時大勢にては敵中

は通ぬものなり今向ふに見ゆし一群の旗の手と一條敵兵と覺ゆるぞ我
 軍騎馳行ん若通らるべくば塵を前さまに振るべし後さまにせば引返せ
 と騎切られしが頼て御方を塵さ夫より所々の堂社民屋に放火し煙の紛
 に赤坂の本陣へぞ馳着たり頼て馬より下りたりしに侯此よし聞召し大
 に喜び給ひ自ら軍門の外に出迎へ長壽今か〜と手を執て陣中に入ら
 せ給ふ今日か〜と怙思召し明日之早合戦といふ前夜不圖も淳か參
 り着しかバ侯の悦びおぼし給ふも理とぞ知られたり石田三成も盛淳着
 陣すと聞つけ見舞つ明日の軍配は偏に貴老を頼み存すると金の團扇
 を贈りける今夜淳申上る旨あり侯太閤より拜領なされし黒地に金を以
 て鳳凰を繡せし御陣羽織を下し賜ふ此夜大坂方筑前中納言秀秋内應の
 風聞ありて諸將秀秋に使を遣し敵々參會われといひ送れと虛病して來
 たらざりしとぞ今日實に慶長五年九月十四日寒雨連に降續きて篠を突くが
 如く冷氣指を墜し人々饑腸甚し僅に藁火を焚て肌を暖め芋魁を煮て飢
 を凌く明れば九月十五日辰時に早々東西の軍初り天地悉く震眩す未だ

羸輸も決さる時筑前中納言秀秋案の如く心を變して内應し松尾山より
 眞下りに西軍の尾を取巻き切て懸りけれと御方前後の敵を支へかね忽
 ち敗軍となりて右往左往に披靡て薩軍は二番備へにて黒田細川福島三
 方の敵に懸合てそ取ける東軍勝に乗るの勢颯々として風雨の如く我か
 備への眞中を七百騎許鏃を並て兩度まで騎入たれと御方散々に崩立誠
 に危急の有様昵近衆侯の御側に立寄てこは如何遊さるべきと申ける時
 に盛淳いらつて卿等今の時に臨みて又何の言かある早々一方を蹴破て
 守護し去給ふべし願は臣侯の諱を冒して茲に死なん侯肯し給えず淳泣
 て言く侯何爲ぞや今匹夫の死を輕くして社稷の重を顧み給はざる堂々
 と諫め奉れば諸臣御馬の口を引ひけつ〜さらば〜と別を告て徐々と
 去給ふ淳は御跡に踏止て寄來る敵を防さつ〜時刻を移に淳の手勢共
 東軍の鉄炮に打しかれ覺へず卻走して小高き丘の後に逃入けり此時盛
 淳齒を切大音聲に穢おびれし人々哉國を去と數百里活んど欲して逃延
 べき道やとある兼々の詞にも似ぬ身怯そと馬を乗廻し下知する言の下

に長崎隼人と名乗り鎗追取のべて未練心仕らじと立上れば一同に皆々
もり返す時に盛淳衆に向て曰侯今此を去給ふと幾程ならん衆僉曰早御
馬驗も見得給はず遠く往給ふと申す扱は目出たし〜と時分と能きど
と金の團扇を打捨てさまに太刀を抜かざし馬の鞍壺につゝ立上り島津
兵庫入道死狂そといひもあへず喚てかゝる時に侯より賜りし羽織鳳凰
の金色旭日に映して耀さける稻麻竹葦の如く取圍たり關東勢眞の大將
と見てければ我劣らす功名せんと前後左右より幡すゝき秋の尾花の風
に亂るゝが如く鎗の穂先一度に突立々々竟に七本の鎗玉に貫れて五十
四歳を一期とし君の御身に代りて討死をぞ遂たりける。又新井氏か關ヶ
原の事書せしを見れど其時徳川殿第四の御子下野守忠吉海道の大將軍
とし軍奉行には井伊兵部少輔直政本多中務少將忠勝をさしむけらる扱
九月十五日の軍も直政が手より始りけり島津方と細川黒田福島等の多
勢に掛合で千人許の怪我人に戦あつて馬をしづめて落て行く直政か士
島津こそ通れといふ直政固より島津入道と見てけれとも下野守殿の御

供は引つゝく御方もなければおれは御方ぞと見ぬよしして在しを直政
か兵本乙甲斐の武田か家にありし者なりしが無骨者にて頻に敵なるよ
しをいひしかは直政こらへす追かくる下野守殿も續きかけて給ふ島津
か兵取て返して戦ふ下野守殿組打して御手負る直政も柏木源藤が打鉄
砲にあたり馬より真逆さまに落ち島津も終に逃れてけるとあり又書せ
しものに其家老の長壽院盛淳といふもの主名を稱て打死しけるを眞と
心得て首實檢に出したればあるにもあらぬ首ありけりと記るせり島津
中務豊久の討死は亂軍の間にや紛れけん終に其有様知るなかりしとそ
今美濃國松尾山の後柏原村高輪山瑠璃光寺てふ寺に島津塚と稱ふあり
墓表に大なる山茶樹を植たり是豊久が墓なりとぞ土人の説に當時三輪
内助入道方齋といふ者豊久の死骸を拾ひ此地に葬り瑠璃光寺を建て菩
提所とせしといへり方齋何の所由にて豊久の屍を收め其菩提所まで創
建せしにや審なる事未尋得す俗説に豊久戦死の後足輕壹人小者一人
生残て流浪しける處に紀州根來法師に豊久の肖像に聊達ぬ者の在ける

足輕小者と此法師を誘ひ我主人は出家せられしとて豊久に偽りて列婦
りぬ豊久の妻信とし事けるを豊久の乳母にてあるもの偽法師か浴の垢
流すとして打見れ本主之背に痣のましくけるに無きと訝かしと申い
たせしより偽者なると發て法師と足輕小者二人をも皆密に打殺してけ
り一説には豊久の守役せし宇田津某といふ者偽者なるを見顯して殺せ
しなり豊久の後室は斯るいはけなき羞辱に自害して果られしといひ傳
ふ甚怪しき説共なり抑豊久の乃父中務太輔家久は双なき良將にて天正
十二年有馬鎮貴より援兵を三位侯に乞れける時家久豊久大將にて其勢
三千人を引卒し肥前國有馬の地に押渡り龍造寺隆信か六万餘騎の猛勢
に懸合一戰の下に隆信を斬て遂に島原城攻援て鎮貴を水火の中に救れ
たり是智謀勇略古今に比類なき働きとぞ申ける家久は日州佐土原の城
主にて幕府の昵近なりしを羽柴美濃守秀長か爲に毒殺せられ後に息の
豊久關ヶ原に打死と云ふを以て佐土原の地を賜之られぬ去らば豊久實
に陳没せずして歸國あらましかば擧族相謀て豊久の罪を幕府に訴へ本

土を復さるべき講解をもあすべきに何とて偽法師を納て其妻も識すと
いふ事の出来けるやかたぐ俗説の如きと別にゆへあるべきにぞ○又
入來院又六重時は當初庄内陣に徳川殿御加勢の人々をも下されし謝恩
使となりて近江路まで行かゝりしに大阪に軍起りぬと聞つけ主従廿七
人にて侯の御本陣に馳せ參し奉倍せられける最初より出陣の戒あけれ
は限従は空肌なりしとぞ扱九月十五日の合戦に打死ともいひ或は同廿
二三日比追兵共に尾を襲られしとある百姓の馬舎の上稻稗の中に隠れ
られしが限従の者共は其屋口の石橋の下に潜居しを追兵に見付られて
強く拷問にかゝり終に主人重時の在所を知らせけるこそ無慚なれ一説
に重時は百姓家の網代天井に登り隠れたるか網代の罅より鉄砲の朱臺
見得けるゆへ敵兵下より鎗刺ともいへり是此兩人さしもの主従の世臣
にて共に花々しき軍をもしつ或は侯の供奉にも侍るべきに時の不幸に
て二人ながら健闘敢死の擧動をも聞えず亡匿乱弊の中に命を隕されむ
といとく口惜しき事ども哉士は死すべき場にて死されば不圖耻辱を

蒙るとや昔楠正成の湊川の戦死の時運を願さる早打死と惜み大石良雄
 が仇討しきと直に腹掻破りてよかしと評せし正成は其必復興の功再
 期すべからざるを知ると明に良雄登命を万が一に僥倖せしには非され
 ども其死所を得しと正成に及ばざると遠しとぞ申ける○或書に此時島
 津方と其家に傳へし車返しといふ備を立て旋回く引退つなきの鉄
 砲を並べ打て井伊兵部が腕を射たりと見えたり車返しといふと上杉謙
 信の陣法にて世に之車掛といひなせる者や關ヶ原の時此陣法を布れし
 といふも世にいひなせしにや此時川上佐京亮同四郎兵衛同久兵衛久保
 七兵衛押川強兵衛五人小返の鎗をつかひしよしと見えぬ謙信の車返手
 矛といふは兵家者流の秘せし所とか申に或書に車返などいふ法は誰も
 下知すれば能せらる所なるが其軍法の要訣といふは君臣相和し同勢一
 致すると島津入道の兵を使しが如く一鉢同心にあらざれば行れがたし
 と書けるものあり此に由て之を觀るに堅甲利兵の師富貴豊大の尊も之
 を千里の外戦陣の間に用れは一も願に足らざるあり候既に關ヶ原を御

退ありて山道をかくり給ふに微給ふ行なれば昨日より朝夕の食さへつ
 やくにはまゐらせす餘りに痛しく見奉りて中馬大藏白尾理右衛門と
 いふ者共陰に村里を走行き米飯白餅を取來て候に進たり然るに手自之
 を幾にも切給ひて一片も聞し食さす左右人必ず皆々食上られ候へと申
 上けるに仰候は手前には乾飯をも鎧の裏に蓄へぬればさな氣遣ど汝等
 こそ草臥けめ汝等か打倒しなんは即己か難儀なり一口づゝありと給よ
 がしど其飯餅を盡く下されける唇従の人々こは物躰なく候とて聲わけ
 ぬ計に涙催して一入の感激彌増して勇氣を發して鉄壁も劈様に見えし
 どぞ三略に有言昔良將之用兵有饋餼者使投諸河與士卒同流而飲夫一
 簞之醪不能味一河之水而三軍之士爲致死者以滋味之及己也この意を日
 新齋忠良主の詠し給へる酒も水あかれもさけとなるぞかし只情あれ君
 か言の葉況や候生なからにして此徳行を保て至誠の情に出給ふはいと
 難有事どもかし○又或人の申けるは當時候孤旅を振め衆と引離れて退
 給ふに尋常ならば敵急に追掛奉らん事必定にて危しと申も愚なるべし

されどもかゝる大敗軍の中にも陣を整へ亂さず徐々として一團の殺氣
 天を衝の形勢なればさすが勝驕たる關東勢も兼て侯の英名は知りぬ堂
 々の陣正々の旗左右なく懸らんとせざる有ける徳川殿の本陣の前を
 過り給ふ時川上四郎兵衛忠兄をして島津某無據譯にてこたひ大坂に属
 して候只今本國へ趣き候ひき委細之本國より謝し候半と云はせ給へり
 敗軍して敵陣の前打通るにかく使して斷し由は和漢にも例なくを聞へ
 し是勇威を張りてしるし給ふにはあらず一旦盟主とし事し大坂方に御
 方し給ふと武門の義理にして又敵陣の前を徐々と打通るをこ見つゝ通
 しなんは敵に取て卑怯あるべしさて此方よりして子細言せられしと此
 亦禮儀なり徳川殿も之を感給ひて強て咬留んともせざりしならんと云
 へり又竊に之を聞ける侯昔者九州の地を定め給ひてより一度覇業を天
 下に建給こんとの内旨あり此度大坂に與し給ふにも西軍若勝軍したら
 んには夙志を遂げ給んとにや密に島津某に留主官の顧命も座在けると
 申傳ふ兼事の成否は天なり時なるべし

○川上久惟贈辭世歌於故郷

關ヶ原の役濟々たる多士雄偉の行迹其人を少とせず然とも文雅を兼て
 哀に聞得しは川上彌四郎久惟也久惟之因幡守忠村十五世の裔筑前守忠
 實か子にて天正四年誕生し幼名を千鶴丸と稱し惟新公に仕へまゐらせ
 慶長五年關ヶ原へ主従五人にて御供したりけるが一人の家來を近附け
 明日の御合戦は君にも御心を遣せられ雌雄を一時に決すべしとの御意
 を蒙りぬ危きに臨み命を委るは臣子の分なり吾幼少より召使はれし御
 恩報い奉らん事此時と覺ゆるぞされど吾妻なし子なし故郷の親人の歎
 き給ふらんほど嘸と思ふされは汝は故郷へ歸り弟の治部右衛門を吾と
 思召没後をも嗣せ給之れと申すべしとて一首の歌を弟治部右衛門久通
 へ送りける

東路の草葉のうへに

露の消て歸らぬ我身なりけり

翌れ九月十五日必死を決て供奉しければ公御急難の場に臨み一足も
 去らず群り來る敵を突留て防戦し享年二十五歳を一期とし討死を遂た

りける白艸原頭白骨を塗て名を埋めず三十一字の情史を照し壯士一た
び去て復不歸易水風寒の威を興さしむ

○大口之壯士到山神之幽居

夫大口の郷は四方連山波濤の如く森々たる山中に人々薨を并べ住居せ
り况や吾藩の雄鎮他方の境目なれば其昔天正のそのかみ一日だに闘戰
の止む時なき時分郡君兼て諸臣の中より文武の人才を撰て町田存松新
納拙齋此両老地頭を被仰付しゆへ郷のかためとして在城せしかば其下
に立つ人々心も猛く義に勇みし壯士共なり其時分何つの頃ありしにや
或時一ツの奇事こそ候ひける比しも中秋望月の折柄にて處の人々昔よ
りの習ひ今宵は明月の佳節なればとて某の處へ集り酒酌はやして月を
弄びなんどて集りしに獨の壯士聊か用事のありて時刻後れしが道すが
ら最中の月に乘して彼處此處と徘徊して今夜月明人盡望不知秋思在誰
家と口吟みて傍ある辻堂に至り前なる巖上に腰打掛て嘯き居たりしに
夜の更るに従ひて草葉の露も玉を磨き四方の氣色も蕭條として吹來る



風癡肌骨に硯しもの淋しき折柄兼て弄びし笛取て一曲を吹鳴せしが餘音嫋々として山谷に響て幽興更に響るにもなく吹すさむ處に不覺身の毛よだちて心地よからず成ければ笛吹き止て後の方を顧みれば世に類なき年の比二八計の美人秀色如二瓊花一霧鬢風鬟形容悽々たるの狀誠に不凡こそ見えたりけれ壯士是を見て且驚き且疑ひ茫然として思えらく月宮の嫦娥高唐の神女の蔭に來格するとや訝しく又一度は狐狸の來て我を魅かすかと腰の刀に手を掛けて睨み居處に美人媚笑て靜に歩み寄ていふよう妾は本山家の賤の女今宵之中秋の佳節といひ殊に勝れて一天隈なく月の光も清亮なれ之賤か心の憂をも晴さんとして歩をここびし折節情郎が吹笛の音いと面白て先より踟躕聞居しに妾か起愛動情誠に以て音曲の鬼神を感じ人情を和くる事は和漢ためし多き事にて侍るぞかし今宵情郎の興を妨くると雖も願くは賤が庵に貴足を勞し給へがしと頻に請しかば壯士熟々思案して田舎里にて見もせぬ美しき女房のかゝる情狀は不思議の事よとは胸中に觀察して假令山魅狐狸の術にもせよ

何かは恐れ退くべき大丈夫其始末見届ぬも残念よと力足を出して諸共に急しが程もなく大路に出て一つの洞門に到る彼美人先立て内に到り云ふ様は今宵圖らすも珍しき情郎の月下に吹給ふ笛の妙音を感じて此處まで列れまゐらせたり人々席設けよといへば女の聲して立騒く音聞えつ頓て美人壯士を引て高樓に登り一間の座鋪に就たるに其狀金銀珠玉を鑲めて是や廣寒宮ともいひつべき光景にて麻頭の香爐に香氣の馥郁として薫せるを桂子月中より落るかど疑はる斯る處に數十輩の侍女共青娥紅粉盡態含嬌で玉盤に見馴ざる珍果時ならざる佳味を盛して座上に備へぬ誠に善盡し美盡せり其時美人玉の杯を擧て壯士に進めて云様妾今宵はからずも如何なる神の縁にして情郎に會する事を得たるや實に千載の一遇なりとて更く酒を酌つゝいひしく情郎の玉指を勞すと云へ共願之一曲を吹て聞せ給へと請ふ程に壯士も不レ得辭日頃己がたしなみし手術を盡して吹鳴らしければ滿座鳴をひそめて聞とれ共に手を打て一唱三歎しつゝ人々感に堪入りぬ美人壯士の吹笛を賞して云様

誠に以て妙手の調曲覺えず妾か心に花を開かせて坐に春情を發侍りぬと云て益酒を進めて人々を饜したれは滿座の侍女共笑壺に入て歌ひつ舞つ艶ある巧詞を演て酒を強られ觥籌幾無算壯士も深く醉草臥て是や音に聞く唐の劉郎が天台山の仙境に到りしもかくやと思ひ遣れて逸興無涯頻りに眠に就たりける時に美人いふ様夜もいたく更ぬれば休み給へどて壯士と侍女共に扶られて洞房に到りて寐臥たり幾くもあく邯鄲一時の夢醒て頻に小渡の心地催しければ洞房をつと起出庭に到り小渡相仕舞て能々光景を窺ひ見れば十五夜の月影はや山端に隠れなんとして立掩ふ松柏の風の聲凛しく聞馴ざりし谷川の巖に走る水音と稍を傳ふ呼子鳥の聲幽に雲間に聞えぬれば扱は吾過ちて人の住來もなき深山の奥にだまされ入りし者ぞかしいやくよしなき處に來て若怪事を招き出さんより寧早々逃出さんとと思しが待てしばし斯る珍敷神仙の隠家に導かれていらざる兵亂の浮世に出んも口惜など案じながら壯士の矢猛心に思返して君の祿を食ひ父母の遺骸を請し身の物外に生を空

ふすべからす末長く君父に事るこそは臣子の道ぞかしと内に拔置し大
 小を取て立去んとて座鋪に至り見るに杯盤狼籍として燈火の影稍幽な
 り其時壯士思惟すらくかく珍敷所に至し事なれば何か証據を取て歸ら
 んとあちらこちらと見廻せば床の上に數卷の書籍を積置けり是こそ屈
 竟の証據ぞごんなれど窈に懐に隠して立去らんとせしかども又彼美人
 が目寤て若も追ひ來らん事を恐れて忙然として立たるが不圖心に一計
 を起し假令神仙にもせよ山魅にもせよ彼を殺さんと何條別の子細かあ
 らんど巧みしこそ惜ひ哉壯士塵界の因縁未だ盡ざる處其儘無二無三に
 洞房に走入り彼美人か寝たりし上に立跨り高田か鍛ひし三尺の龍劔氷
 の如くなるをすつばと抜き高胸本を腦も碎けよと刺したるが餘りにせ
 きこみし故か又は彼美人神仙の方術にて刀劔の刃を免れけん飽まで着
 たる衾を突通して美人の軀に之留まらず座鋪にぐさと突立し音に美人
 の目覺てあつと一聲叫びし聲こそいかに百千の雷の耳元に落かゝるが
 如く天地須臾に震眩し在し美人は何地にか飛去りしども知れざれば壯

士仕損したりと大に驚き南無弓矢八幡助け給へと逸足出して逃出たる
 に天地俄に黑暗となり美人か叫びし聲山谷に響きて只足下に在るが如
 く岩の角樹の根といはずひた仆に顛ひ落ち命を限りとぞ逃けたれど暗
 さは闇し深山の奥の事あれば身軀生ける心地なくて漸々夜も明方に及
 びてぞ叫びし聲も遠さかりける程に息つきながし旭陽の出るを待付て
 東西南北の方角をとりて峰を越谷を渡りて道の四五里も行し處に遙に獵
 人の犬呼ぶ聲聞ゆ夫を力に行程に犬呼聲にはあらで己か名を呼ぶ音な
 れは扱之朋輩親類共の吾を尋ね來しものぞかしと己も聲あけて互に出
 逢つゝ暫し之仰天して言葉も更に出あえず手に手を取て始終の事を物
 語れば人々先は恙なきを喜びつゝ別れ歸りける其日數を數ふれば八月
 十五夜より早一七日をぞ過しける人々奇異の思をなしにけるが壯士は
 洞房酒筵の興に草臥果て臥たるを僅一睡の間あるをかく晝夜を隔てぬ
 るこそ信に古人のから歌に仙家日月本長間と詠せしも理とぞ思ひ知ら
 れけり扱彼山神の幽居に到りし始末を地頭に言上し証據に取來りし書

藉も差出したるが誠に人間世界の物と見えす譬へは蟬の羽の如き物を書藉の様に拵へて中に番笏の如くなる物を書散して在けり當時の人事義を解してかたく是を地頭屋簾の庫中にひめ置けとて納たりしを間もなく其府に火起りて終に焼き失せたり嗚呼惜哉郷に博洽の君子張華の人物なく是や浦島太郎か常世の郷の寶物不老不死の秘策にてありしを知らんを神仙慳之人間に傳へざるにや返く遺憾の事とぞ今に語り傳へたり

○町田存松謁太閤秀吉並察梅北矯命

町田存松之出羽守久信と稱す本家十七代の家嫡たり父長門守忠榮之天文中實久の反せる時大中公を翼戴奉りて功勞あり祖父伊賀守梅久は天文五年十二月七日の曉鹿兒島犬迫村にて戰死を遂られしかば大中公其の忠貞を感し思召て舊領石谷邑の外に神殿村若干町の地を加封し給ひ久信之龍伯公の御時に御家老職に拜れてけり久信素より智勇兼備りたれば始大口城の警衛として境目の重任を命せられ天正五年より同十二

年に至り豊後大友氏を伐玉ふの時一方の大將を承り關白秀吉九州に攻入られける時之新納武藏守忠元等を肥後地より求麻山に掛りて御方の兵を引纏め賊の巢穴を跋渉て難なく吾領地伊集院にぞ歸陣せられけり今年天正十五年夏四月廿五日關白秀吉千臺川を渡り泰平寺に陣營を据ゑられ吾公と和議既に成て五月六日公伊集院へ入らせられしかば久信はかのれの領邑石谷より數多の雜費を供給し奉り朝の餉より始終の支度も世話しまゐらせ公頓て雪窓院にて御髪をろし給ひ龍伯公と御改名遊之され五月八日直に泰平寺に趣き給んと裝ひ玉ふしかるに東國數万兵の敵中に詣て玉ひなんこと國家の一大事此時に極りぬと上下万民安きこゝろもなく婦人老弱は資財雜具を山林に持運適君恩に誇り國祿に飽し輩さへ目を側め手を袖にするの形勢にて譜代舊勳の重臣之かのか采邑私領に引籠りその攻口固めて在合すさしものきのふまては九州六ヶ國を臣服せしめ靡かぬ草木もなかりしかとも公の御轡を昇奉るへき駕輿丁さへ逃匿て無りければ久信且怒り且泣て申されけるは朝に夕を

測らざるは人心の危き習なからかゝる時だも義を失ひ生を食ふこそ無情者共かなと自身馳廻りつゝ伊集院衆の中馬仁右衛門其外土師松本杯いへる者を撃出し來りて御轡をぞ昇まらせける此時公の御供に候ひけるは出羽守久信本田下野守親正長壽院盛淳平田美濃守光宗野村民部少輔良綱久信の子町田左京亮忠綱二男勝兵衛盛吉等七人のみそ龍伯公を保護して參られける御太刀之勝兵衛盛吉へぞ御持せなされける扱泰平寺ふそ秀吉に見參し給ひければ秀吉も薩摩陣和陸なくは軍難儀なるべしと甚だ氣遣れしにかく無事に和陸調ひしかば安堵悦喜のあまり自ら佩れし大小を解て公に賜り且久信へ之自らの羽織道服各一領を即座に脱て拜領せられける其上久信に之御一族の親臣なることを聞し召して二男勝兵衛を質に出すへきよし命ありて泰平寺に留られ公には御暇玉はり鹿兒島郡吉田城へ歸り入らせ玉ふかくて文祿元年秀吉殿下一天四海を掌握し猶も飽す思えれける之昔神功皇后三韓を征伐し年々八十餘艘の貢船を日の本に朝献せしを皇國の武威漸く衰へ弘安四年蒙古

十万兵を遣し朝鮮王を案内とし我皇國を襲ひまらせしを幸に之宗廟社稷の靈に頼て賊船二十万艘博多の海に覆没すといへとも我朝の兵今に至り異國に攻入て當時の怨を報ふ者なきは永き日本の瓊瑾のみならず今我六十餘州を平治すといへとも朝鮮王自來りて其賀儀だに述さる條吾朝に對し不敬の至りなり抑皇朝の事之天照日神の皇孫千五百秋の行末限りなく治めしろしのす御國なればいとも畏こし出々吾朝鮮王の罪を鳴らし直に明國を攻討て四百餘州を瞬息の間に踏禿し大日本の武威を海外に震張し胡元入寇の怨みを目前に報ふべしとて忽朝鮮征伐をそ催されけるかゝりければ龍伯公義弘公忠恒公を始めとして一万余騎の精兵を引卒し朝鮮國へそ押渡らせ給ひけるされど龍伯公は東照宮の御取持にて肥前名古屋に在陣ましくけるにことし六月中旬梅北宮内左衛門國兼といへるもの謀叛を企て龍伯公の命を矯り肥後佐敷城を攻落し村落を亂妨し且鹿兒島へ三たひまで使を遣して申送りけるは龍伯公既に諸將と謀を定め再び豊筑肥の六ヶ國を打從へ給えんとて臣梅北

にも兵勢を催し既に肥後國へ打入れり秀吉には是を聞て名古屋より唐津へ押渡らんとせられしを古城の渡にて難なく秀吉を討取たり只今破竹の勢ひに乘し三國の人數を傾け夜を日に繼て早々肥後に攻入らるべき由被仰下る所なりと告たりける此時鹿兒島に久信并新納忠元鎌田出雲新納越後本田六右衛門等御留守役となり御政事の大小となくこの人々掌り申されけるに此使三たひまで敷なみを打て急を告來りければ忠元以下の諸老臣大に驚き願きて既に出陣の用意櫛の齒を挽がごとし時に久信首を振て肯せずして曰熟思ひ廻らすに吾公是程の大事を舉給之んには必ず墨付の御親書を以て先ッ臣等にこそ告知らせ給ふべき況や義弘公を始奉り軍を絶域に曝し父子兄弟離散して安きこゝろもあらざるに何とて梅北ことき匹夫にかゝる大事をは計らせ玉ふべきや是梅北が奸計なるも知るべからず卿等必ず騒き給ふかと曾て同意せざりけれと諸老臣も稍静りながら準男の若者は久信が案し過し卑怯ものと私語けるに果して五日の後梅北か謀叛結構のよし申來りければ諸人久

信が先見の識ある事を稱しあひ皆跡せきをそいたしける此時若誤て梅北が奸計を信し干戈を邦内に動し肥後國に攻入ならんには秀吉の震怒益て天を衝き其殃將に不測に迷ひなんと必然なるに久信神妙の遠慮により一言を以て國家を安んせしは社稷の臣といふべきあり又文祿四年乙未の歲太閤秀吉より御領國の寺院及其餘の田地を毀破せしめ其上一統の田地を丈量して五十七万八千七百余石の外大隅加治木溝邊等の十ヶ村一萬石と秀吉の食地とし清水國分敷根等の五ヶ村六千三百石餘は石田三成り領邑とし肝付高隈等の三ヶ村三千石と細川幽齋か領邑とし庄内八萬三石は伊集院右衛門太夫幸侃に知行すべきよし幽齋太閤の命を受て配當し三ヶ國の田地は偏に幽齋一己の手に出る程なれば譜第新參どもいはす思ひく幽齋の旅館に奔走し我後れしと苞苴を持捧けて己れくか領地知行を濫望し世の嘲り人の譏りをも顧みず淺ましかりける世の勢なり然るに出羽守久信一人公用の外乙未た曾て幽齋の門に周旋せず御當家の事は鎌倉右大將家より三ヶ國を封せられ數百歲連續

せる所なるを此度梅北か謀叛一揆不慮に到來し其故を以て田地の支配を命せらる事是非なき仕合あから主人龍伯を始め在陣留守の事にて毛頭存寄せざる所にて候得は國家靜謐諸民安堵の御仁政を施されかしと幾度も申込て一度も自己知行所等の内訴とては申出られさりし程に幽齋支配中久信は無知行同前なり扱翌々年正月に幽齋田地支給の事終りて名古屋の如く發足せむと市來まで出立ありし時久信之幽齋見送とし市來迄追付猶も名古屋表太閤の御前を懇に頼み入られ直に鹿兒島へ歸宅し又曾て私事に言及ぼさす此時幽齋久信を感心して市來郷吏どもへ申されし之己れ鹿兒島へ在し日大小身によらず我がちに知行の事を望まれ一己の榮耀を得られし輩今日に至りて之我東歸を一人回顧せるなし然に久信其身の訴とては露申出されす主人島津殿御爲計らひ只管心懸られしかは己れも大形にて久信へ之知行逆も班さりし去るを今日遙々是迄も立出て見送られ猶も名古屋表の事ども町噺に託せられしは返すくも恥からぬ人物哉詞を放ちて稱歎せられたり是よりして久

信之京師浪花の御家老として公邊の大事を掌り慶長五年八月終に上方にて病死なり久信人と爲り寡欲にして私の利を計らす其上生財の道さへ賢かりしか之君にも其公廉にして私あきの節操を御察し御勝手向の事任せられ諸所への御寄附領地の命まで久信一判にて下されたる多し剩へ公より神文感狀を賜り祇答院大村の地を増封し給ひけるとそ見へたりける且久信の祖大隅助久と云ひしは道鑑公に仕へ軍奉行たり其が持せられしと云ひ傳ふ軍幡一流あり黒餅に十文字を箔書せしと見へ残りたれど五百歳の星霜を経てし故に惣地の絹は蟬羽の様に鬆く痛みて半之切れ捨たりける幾許の戰場に雨雪を冒して猶今に存へしと珍しき舊物にてそありける

○博虎實錄并泗川大捷説

虎狩の事は釋文之か筆に備りたれど其又彫龍にして實を失ふものあり今高原黒木の某か日記を取て左に記るす年號は文祿の年中忠恒公拾七歳の時始て御上洛栗野の城を打立日州赤江の川より船に召し則ち出船

豊後地に着いぬを渡し島尻と申す所に着次日出船にて於富と申す瀬戸を通り其日は於富の在所へ着三日逗留夫より出船於富瀬戸と申すを通し安藝の宮島へ着三日滞留にて出船日數拾日餘りに大坂へ着津大坂は天野屋恩濟と申す町人の所へ止宿半年計座在し堺之町林屋と申す町人の所へ轉宿御逗留中京都より飛脚罷下早々御上洛の旨申越し大坂より川船にて御登り成され京都へ次日上着其頃之京都二條の御城松の丸と申す所へ内裏と向合の馬場大名小路にて上屋敷は龍伯公下屋小川の方是に之惟新公奥方座在し下屋敷へ御譜請中忠恒公も座在しける處に伏見より飛脚參り早々伏見へ御入成さるべしと申來り夜がけに伏見へ出られ石田治部少輔同道にて登城謁見相濟み退城成され其日京都の様に差越され其年の暮方に大坂より出船高麗へ渡海座在し高麗唐島釜山海表より四十里餘唐島は北南と流れたる島にて流れ拾四五里と云へり北の島崎之島津殿城を取り南の島崎は福島大夫城を取り其後京都より諸大名衆へ虎狩命せられ島津殿にも同前にて頓て唐島より出船東國

の内茶碗山と申す所にて虎狩せられ其日虎二ツ獲られ狩の串目より内に入る人なし上下皆々圍ひ虎居し山は三ツ四ツの内一入高き山にて其山の折口より二三拾間程串目より拾二三間の内に義弘忠恒両公馬にて平原へ座在せし其日雷霧甚しく雨降り其高き山は古野の高湖所々に赤松生ひ夏木山にて栗の木櫻の木檀木にて其時惟新公御意候者急き使を以て猪に心掛け虎を逃がし候は、双方の間伏に則ち腹を切らせ可申と達せられ則ち馳せ歸り御意之通り銘々に申渡せし由言上せり其後又々御意ありて薩戸の者の事にて猪に心を掛虎を逃かし可申候間弓持は弓絃を弛し鐵砲持之火繩の火を消し能々見届て參るべき由稠敷達せられ其後使者二時計に馳返れり追て御意成され候は雨降り申に虎之出ましく日暮に及べり依て又使遣すべしと仰出され兩人罷出しに其處々々より脱けて入申さるべき由仰出され其使者二時三時に罷歸りて御意の旨具に申渡せし由上申せり則御待ありしも何方よりも脱けて入申されず

に付惟新公忠恒公大に怒らせられ皆々諸士へ何共居なから一人も入る

人無く御父子御覽仰らるゝに人之無きのかと御意にて御口寫し上野權
 右衛門と申す中間忠恒公御馬の右手の口を控へ罷居しに權右衛門参り
 候て虎追出申せと御意成され畏てと申し御馬の口を放し両公座在し
 により右の串目に突上り高き山六分目程より横へ焼野を拾二三間参し
 に其時權右衛門姿は見へす夫より高き古野の大薄原に入り薄を分けて
 参しに其薄動き申すを下より上下皆々御覽して薄の中を權右衛門十二
 三間参る時分に高き山の千丈より虎權右衛門を見付高聲にて唯み申す
 事凛しく大地も揺く計り響さしか忽ち千丈の嶽より下様一飛ひに飛掛
 り忽ち權右衛門を噛殺し牙に懸け高溝より二三尋上に投げ上けり權右
 衛門地に落つくと虎又本の千丈に飛上り怒れる貌凛ましかりし扱虎
 權右衛門へ飛掛りし時切割り候哉虎の右の目真中上唇に掛けて切割られ
 是に痛み居たるを續ひて一番に帖佐六七貳番に福永助十郎三番に長野
 六兵衛馳せ着て虎を刺留けり六七之虎に股を咬れ齒形四つありて血は
 出てす四の齒痕より白汁流れし扱權右衛門死骸を手輿に乗せ両公御前

に召寄せられ御覽候得者虎飛掛り咽を咬切られ居たり左候て權右衛門
 刀は鞘計り腰に指し身は無之由を申上られしに両公御愁歎成されしと
 云々

文化六とせ宮城邑主の藏めらる朝鮮征伐の屏風の畫と搏虎の卷物とを
 看侍りし事の有き明人の多き事は山谷に満亘りて幾万人と云ふ事を知
 らす去れと多くは甲冑をも着すてさぬ笠など云ふものを指かさしつゝ
 所謂董一元か數日の勝に狂て鬚を捻てたひしく疾雷不掩耳と物せしか
 如く吾君の御勢を之只手捕にせんと構へしと云ふか信なめり此時に泗
 川に籠らせ給ふ御方は籠中の鳥にも譬ふべく簀に入し魚にも似つべく
 何地を差して泄出つべうも覺へず誠に危き御事は言ふも更なるべし獨
 大將義弘公謀を帷幄の中に廻らし勝こそを千里の外に決し給なる御氣
 色に諸人も恃み奉りて御下知を畏みし有様なるに折節赤白の兩狐水の
 手より出て明賊の藥櫃に火移り忽に徐の兵三千人は黒烟の中に焦れ死
 してける機を移さす東西の門を開き時の聲を作り掛け響を駢べて突て

出給ひしかは明賊共之只周章狼狽つゝ我先にと逸足に逃出し侍りし程に一人して之四人五人も賊を伐伏せ突殺し世に稀なる御勝利得させ給ふる御事共中々申すも愚なるべし某故に異稱日本傳等我公の泗川の御戦に預れる事共常に打誦んして天の御たまのふ由を得玉ふる事の賢さを獨思ひあはれとそ感入侍るなり叔虎狩の勢こそ殊に凜ましく其人々の鬣の毛のそけ衣の鶉毛なる大將の象と共に席を同じくして彼猛虎を二ツ獲にし玉ふる勇ましき中々今の世の人の習ひ及ぶべき有様にあらし數多の年月戦場の業に馴れ給ひ人々に已獨の働なきはあらし主従只一身を働か如く勇み進みしよりそ斯る勇ましき御舉止を侍りけめ近比漂着の唐人共に唐山にて虎は如何してやは捕候と問ひしに先づ虎住む邊に大小深き窠を堀り其上に枯木の柴薪を蔽ひ夫に犬を括り付て置ける時犬大に悲み叫ぶ事大方ならず虎は犬の鳴聲を聞付て喜びつゝ山より下りて只一飛に犬を囓んと飛付たる時枯木の枝とも折れて虎は窠の底に落入ぬる犬の鳴聲の止を相圖にして行見れば果して虎は窠の底

に猛り狂ひぬるを上より大木となく土などを落し掛て虎を埋殺しこといそ語りける謀の賢き様ながら餌食に逢へる犬の無慘なる其穴を堀の費なるなど皇國人の業に似合あくとそ

○山田有信辭羽柴秀長賜天草

並島津忠隣沒根白坂之陣

山田有信之新助と稱す入道して利安と號せり其先高望の孫利仁將軍の遠裔なり三位侯に奉仕して腹心股肱の親臣たり天正十五年四月六日豊太閤九州に攻入ける時有信か楯籠ける日州高城の城を其弟羽柴美濃守秀長二拾万の兵に將とし高城財部の近邊五十一ヶ所に陣を取て晝夜息をも繼す攻たりしに有信は僅五百餘騎にて少も辟易ます防ぎ戦し程に關東勢遂に之を抜こと能はず然に侯既に太閤と成を濟せ給ひ有信にも下城候へと仰遣されしかとも有信敢て降らす敵兵疑を生して又々合戦にも及ぶべきなと申ける因て再三に及び町田駿河久充をして命ありしかは有信初て従ひ奉る羽柴秀長有信か勇英卓越を感賞して肥後天草に

於て四萬三千石を下さるべき間天下に奉公すべしとの事なり自家の傳
ふ所には賜_ニ新恩之地八百町之朱印と云り有信申けるは不肖の某に過分
の厚恩謝する所を知らず併しながら天草一圓主人義久領分にして下さ
るべしやと復けるに秀長よりさにては與へ難し義久領地の外にして昵
近として召出され下さるべしとの事とありしかは有信對て主人に引離
ての御奉公に候は、幾度仰候とも固く御斷に存候とて四萬三千石を塵
芥とも顧みす御受申さ、りし人物なりかく忠膽義肝の志を候にも深く
思召取り給ひければ慶長十四年六月十四日有信六十一にて身まかり國
分龍昌寺に葬りなんとしける時態と其棺槨をバ隼人城の橋の上に迎給
ひ候自ら出臨給ひて利安に燒香なし下され一首の和歌を御手下され
ける

夫利安慶哲居士は山田越前にて猛き心を専とし疵を蒙り名の譽れ有
こと度々也然に忠節の者なれば内外をいはす召仕しに予五三年の間
心地例ならず怠る事あきを歎き身の替りにならんとし云ひけるか誠

なる哉夏の初めつかたより病の床に臥しみな月十四日身まかりぬと
聞て不便さの餘り一首をつらね手向とするものになん

法 印 龍 白

運葉のおきこほしたる露の玉のをはりや君か爲に捨けん
山人窃に謂く利安居士其如何ある佳士とか見るべき世人徒に高城力戰
の功を稱して其高義の金石を貫きて動くべからざるを知る者少なし後
世利達に競ひ功名を望むの風習よりして視むに乙理安の進退自ら少小
に安して可惜四萬石を取放せしとや申すべき然れ共君臣の間は名分の
大義をもて繼ぎ持てり人倫の道は此大義を明にして天下後世に則るべ
きより大なる者あし叔季堂々たる儒臣すら猶恩を遺れ義に負き時に趨
り祿を保ち自ら孔孟の道統茲に存すと落着し墨痕詩賦に夸毘り俗人無
識の輩をして驚嗟羨伏せしめ暗に趨孟頫の涎を嘗るに似て窃に有知者
の爲に讖笑せらるゝを顧ざる者あり亦何の心ぞや吾友嘗て浪華の中井
履軒に見て曰先生何爲そや今の盛時に丁て二伯苞の美祿を辭して瑩々

たる市井に湮没せんと欲するや履軒答て曰夫れ万鐘の祿千繫の駟皆人の欲する所我豈之を避て一書厨の蠶魚たらんや我道に適されは今日身に黄褐を纏ひ口に眞黒の羹と葱の菜を喫ふも此身恙なく吾心樂めり況や碌々二百俵の局に明々たる両眼豈賸すことをなすべきやと大笑しけるとかや秀長有信が忠勇絶倫なるを奇賞して一朝に四万三千石の利を以て之を膝下に誘んとす有信義を守て利に回らず秀長稱其節操を潔として終に屈服せしむる事を得ざるなり此節若る有信忽に利を見て義を忘れ秀長微辟の命に従て必ず有信を匹夫の勇とし又我藩其人なきを察するや窮殲すこと小田原北條氏が如く爵邑本に復すること或はなふして他日四萬三千石の爲に大方の恥辱を招かんも亦量べからず故に賢者は必ず其常を取て變に應ずる事をなす彼外觀を専とし富貴に誇るものは殆哉利安の秀長に復命する遠き慮ありと云ふべきなり而して利安の後竟に血胤を絶てり天も識ことあきさにや島津三郎次郎忠隣と申すは薩摩義虎の次男にて金吾歳久主の養子なり生年十九歳の若大將にて容顏愧

偉勇畧衆に秀たり天正十五年四月十七日と申すに日州表の惣大將大和
大納言秀長の先陣宮部善祥坊か根白坂の堅陣に面も振らす無二無三に
駈入て防ぎ戦れけるに敵衆の飛か如く四方より打かけし鉄砲の彈丸忠
隣の鞍の前輪より後へつと射透して左右の股より沸出る血瀧の如し忠
隣家來の鎌田囚獄左衛門へ水飲せよと申さる囚獄左衛門畏り如何に坐
在すと申すもあへす側ある青梅を枝ながら手折てまゐらせけれと一口
嚙破て其盛息絶え打死なり斯く忠隣烈しき防戦に雲霞の如く寄掛たる
上方勢も進み兼て猶豫ける惣大將秀長既に耳川を渡して二の目の合戦
を初むべしと下知せらるゝに尾藤甚右衛門諫て申けるは今朝より島津
か掛り口の合戦は武田勝頼長篠柵破の勢に勝りて候大將のかゝる時に
鹿忽に蒐り玉ふものおらずと馬の韁を引留ける夫故宰相公も徐々と師
を纏て飲野の様に引返し給ふ忠隣踏留て無二の戦死なくんば寔に大事
の軍なるべし此時の軍の次第之間々齟齬せし事も多けれ共他國人の實
録あるをば探て左方に載ぬ龜井武藏守物語に曰天正十五年三月秀吉筑

紫へ御助座島津を御攻被成し搦手の大和納言秀長近江中納言秀次八万にて島津義弘同家久兄弟か二萬餘豊後府内より日向の縣へ蒐り薩摩へ引取候跡を追ふて亂入高城財部の両城を取巻攻給ふ附城五拾一ヶ所其内耳川を越て根白と云所に壘を構へ宮部善祥坊繼潤木下平太夫貞基龜井新十郎廣政垣屋隱岐守光成福原右馬助直高一萬五千にて陣取て島津出張の口を押へ申候四月十七日朝島津義弘より使來て曰高城に籠り候士卒御助被下候は、城を明渡可申となり此段五拾丁隔たる大納言殿へ申遣し是より御返事可申とて使者を戻す宮部善祥坊は島津使者の様子にて今夕夜討可有事を見知り人足千人山々へ遣し竹木を伐寄せ陣の前に深さ二間幅三間のから堀を堀り其岸に彼竹木にて柵をゆり自身も士卒も物具して待蒐其外之外圍の者段々出置候如案其夜の亥の刻島津義弘壹萬六千にて根白の陣へ押寄せ兼て心得し故宮部善祥士卒に先達て木戸口へ走り向ひ一番鎗を合せ宮部善祥坊繼潤一番鎗と名乗る其手の兵田中九助其子彦六國友半右衛門天田村太郎右衛門二番鎗を合せ防

戦ふ垣屋隱岐南條勘兵衛木下龜井福原の諸大將取合身命を捨て防戦ふ島津義弘と元より剛將なり手づから鎗を提げ真先に進て攻蒐り樺山平田伊集院石谷町田の本名の兵とも面も振らす柵に付て天地を響し攻戦ふ宮部一組の人々柵を隔て鎗を取て防戦ふ両手の手負死人將某仆に異ならず島津か兵柵に就こと蟻の如く堀にも透間なく込入攻戦ふ善祥坊時分は能そと扣の繩を切て柵を堀の上へ押倒す柵付たる兵も堀の内の兵も皆柵の下に押付られ死する者八百餘人なり宮部一組の兵共柵を倒して内の柵へ引籠る島津か兵共柵を渡り味方の死人の上を走り渡り内柵を攻破り十七夜の寅の刻に三之丸二之丸操破りしかば善祥坊を初め本丸へ引籠り命を惜まず防戦ふ夜既に明けて十八日の朝なり義弘彌攻め詰て難儀に及べば大納言秀長卿と五拾丁隔て居給ひしか三万計にて耳川の端まで推來りて見渡せば根白の崎と義弘か軍兵雲霞の如く取圍み鉄砲矢叫の音聞の聲相交て天地も響く計なり秀長見給ひて只今善祥坊一組被二打干と見へたり耳川を渡して後詰せんと馬を川へ打入給ふ尾

藤左衛門尉知定馬より飛下り秀長の馬の口に縋り今義弘か勢を見るに
 武田四郎勝頼長篠の蒐り口に異ならず此強の鎧先には關白殿下も恐ら
 くは叶ふべからず必ず川を御越不可有と諫め申しき藤堂佐渡守高虎は
 手勢引連れ川を越して搦手より根白の塞へ蒐り入り善祥坊に力を合せ
 高虎も手自敷人突倒しけれ共義弘彌蒐りて揉にもふて攻蒐る善祥坊一
 組も防兼て見へけるを黒田如水其子甲斐長政は秀長卿の進み給はさる
 を見て手勢計にて進み行き村上彦右衛門を遣し根白取手へ蒐付只今大
 和納言殿六万にて助け來り給ふぞと呼はらせける故取手の中とつと
 勢ひ出ける如水長政父子共に耳川を渡りける栗山備後守利安先陣に渡
 す後藤又兵衛政次毛利但馬衣笠因幡竹野石見井上周防打入く乗渡し
 義弘か陣へ切て蒐る秀長卿の御内羽田長門守千餘騎同耳川を渡して黒
 田先立んと鎧を入れ根白の取手是又利を得て突て出て相戦ふ此時小早
 川隆景二里隔て陣を取ける根白の急を聞て三千餘にて耳川の端まで推
 來る大和納言殿見給ひて今我川を渡りて島津を攻んと存すれ共大將

同心不仕候如何可有之と談合あり隆景笑て答申されず隆景家老伯耆守
 就遠浦兵部宗勝背破具足の古道具にて大納言殿御馬の前へ出島津は今
 日の珍客にて懇に問ひ來り候此方亭主にて候に迎に出て見廻の一禮を
 からんや御相談も事に依り候と憚からず申上る去れ共秀長卿尾藤を初
 め何れも皆々進み兼る故伯耆守兵部も則馬に打乗て川を越て乗渡し隆
 景旗を進て三千餘耳川を渡して義弘か跡を切んと進れける義弘か甥島
 津三郎四郎忠親踏止て討死す其外七八百餘り究竟の兵共討れたり義弘
 も根白の圍を解て引退き在々火を掛け猪の猛る様にして引取ける隆景
 如水使を秀長へ遣し義弘は一万六千味方は八方に及び候間鉄砲二三千
 挺にて左右の峰を嵩取り付送り大軍を以て追打候は義弘を打取直に
 鹿兒島へ突入に可仕と頻に被申けれ共尾藤左衛門時々諫止しかば義弘
 遂に引入けり頓て高城財部も落城せしかは彌鹿兒島さして推て行く島
 津義久之惣大將なれば肥後八代に陣取居しに日向の事を聞き是も鹿兒
 島へ引取ける

○濱田榮臨殉死遺誠子孫

濱田民部左衛門經重入道榮臨は若年より度々の合戦に高名し武備の聞え世人普く知る所なり然るに後醍院喜兵衛淡路を改稱し後入道して淡齋と号せし者元來は西征將軍の宮の皇族にて惟新公朝鮮御歸朝の時より御當家へ事へ奉りける惟新公帖佐建昌の城下餅飯田原にて御鷹野遊はされ淡齋嫡子高橋少三郎も御供にて候ひしか公白銀坂の方を眉影をさして遙に御眺め遊されしに老人一人田馬に草鞋負ふせて打乗参り頓て下馬して跪きぬれは公殊の外御叮嚀に御詞を掛させられ候に付右之老人申上候之餘り久々富隈エ参上得不仕無心許一候程に今日之龍伯公エ奉伺御機嫌一度罷越候と申候得者公も嘸御悦び被遊べし歸りに之必ず立寄候得といと御懇に仰下されたり此時少三郎御側衆へ向ひ自らと新參にて今の老翁誰とも存知らす候何某と申方にて候哉と尋ねたるを御側衆あれ濱田民部左衛門と申人にて候者をと答ければ少三郎打聞興醒貌にて居たりしか御供仕廻歸宅候て父の淡齋に物語けるは今日之



餅飯田原にて濱田民部左衛門殿に逢申て候渠は武勇世に勝れ故太閤ま
ても御存知遊れし程の高名の武士にて候に今老ぼれての後瘦たる馬に
衰しき衣着て行通られしを見て候わ程武功の士さへ今の如くに候得
者我々つれ御當家に仕へても所詮世に立ことはあり難かるべく候なり
無功の某おとは恥敷こそ候へと夫より御家を御暇申して因幡鳥取へ籠
仕し今以て松平相模守エ物頭格の勤致し世々高橋名字にて後醍院の嫡
家たり淡齋二男藏之助は武藝も飽まで仕おふせながら風雅の道にも携
はり誦好にて夜晝とちく誦ひける程にふる上人めあど、識るやからも
多かりし扱慶長五年關ヶ原合戦より六年目惟新公七拾餘の御歳まで折
節吉野群の岡に御登り安きにも危きをな忘れそとて軍陣の調練を御講
し遊され一とせ御馬追に是迄の御名残として御上せ遊えされしかは何れ
も爰を晴れど馬鞍華やかに装ひたち人ませもせぬ顔付して御供せしに
藏之助は馬にも乗らす煤けたる野袴打着て上りしかは例の二歳共見て
どぬるさ出立哉と半嘲り合ける扱群の岡より御勢一度に乗下ろさせ給

とんする時藏之助袂より拳飯を取出し己か馬に飼ふぞと見えしひらと
 飛乗り格をニツ三ッ打や否や真先に群の岡を乗下して先陣をしかば今
 迄嘲り笑ひし者も流石は淡齋の子程ありしよなど舌振ひしけるそと是
 と扱置濱田民部左衛門はさしもの數度の戰場に千辛万苦を経しか共嬰
 鑠の壯士老て益止す龍伯公に殉死の御約束を申上慶長十六年子孫へ遺
 誠八ヶ條を言ひ置に書附る其文に曰
 一御奉公の筋少も氣任を申間敷事
 一身の程を知候而利口申間敷事
 一腕立し上に目をつくべからざる事
 一御役人中の曾而猜み申間敷事
 一善惡之友見合可事
 一大酒すまじき事
 一念比之朋輩逆も奥座え入間敷事
 一朋輩入魂之筋取分申間敷事

二月十六日

濱田民部左衛門入道判

と書置して今年龍伯公御他界被遊しかば七拾八歳の皺腹掻切てぞ御供
 申奉ると辭世しける

ふたつなき命を君にたてまつる心のうちはずめる月かな

夫高祿美官は人の辞し難き所概ね老てと猶餘財を貪り子孫の安富尊榮
 を計り或は隠居して身を樂地に居しめんと物せる之後の世の習ひなる
 べし榮臨入道若年にして戰場に苦み老て猶疲馬藏衣に安んし自ら足る
 事を知りて未だ曾て己の功に誇らす老らくの末か未迄子孫を誠るの敷
 言を留めて稀古の歳に及び君の御爲に殉死して永訣の一首其心明なる
 こと猶皦白の如し世の高く性命を談し生て世に功なく死して子孫に教
 なきより之を視れば非常の人と云ふべきにや此榮臨へ太閤殿下より拜
 領の鎗あり長さ壹尺貳寸計と見へたり又惟新公御歌二首を珍襲す一首
 の御歌と御親筆

梓弓はるたつよりも久方のひかり長開けき花の色哉

又一首託筆

人のうへ鏡にかけて見し咎のわか身の上になど曇るらん
始の御歌は優長にして餘情限りなく後の御歌は自他を鏡戒し給ふの秀
逸にて誠に凡人に御座まさいりしかと其下に事へ奉りし人々も自ら榮
臨如きもの世に輩出し侍りしこそ最と貴き御事ぞかし

○讀龍造寺隆信碑

並島津家久援軍記事

里諺にいひ傳へける龍造寺隆信と極ての大漢にて其首級を擧るには
人の夫丸を用ひしとて又その首を太守公の御實檢にそなへ奉らんと肥
後の高瀬川まで持來れるに頗に重くなりたちて敢て動しがたくありそ
ればその邊ある願行寺てふに葬りしなど肥後人のいひ傳ふは蓋し隆信
か平生の驍勇を口號に稱へける兒女の談栖にや出ぬらん文化五年十月
十四日某江門にまゐりなんとして此高瀬の驛に旅次せし時隆信の墓碑
あるよしを里人とも事々しく申あへるゆへその碑を讀侍りけるが吾藩

に傳てしとと事實稍齟齬しける程に辛うしてその碑を寫し取今又是を
こゝに書載て吾藩の正史に照し見るものをつから其誤謬を知らむこ
とを希ふされとその碑又歲月積り今は彫缺て讀がたきもの多かりき

肥後山下郡高瀬村願行寺龍造寺隆信墓碑銘

泰嚴宗龍居士

嗚呼故西肥侯之墓也公姓藤原諱隆信其先出自鎌足公世之有
顯位于朝名秀清者爲吏出衛西肥仍其職文治中秀清之孫秀家
以良家子封於西肥龍造寺因氏龍造寺焉其後稍大至公始國於
是室町氏之叔世天下大亂郡雄方興狼牙而紫塞之國豐薩
爲大九國諸師不之薩則豐不朝豐則薩一彼一是以勢傾奪公勃
然起自西肥角堅競銳鼎立麻亂之中公爲人勇而則仁而能愛士
及下其執抱鼓泄軍門一令則士氣踊躍恩効叱咤則三軍遂巡不能
進於其身數十戰鋒未嘗挫屠城斬將不可勝而數矣亡何齧食二
筑肥及後豐自號五州太守初公之伐吾肥也會薩來救曠日彌久

士疲兵頓雌雄未決有居間者乃與薩和約中分肥割高瀬川以西
 爲西肥東爲薩已而弄約有森嶽之役公少薩師欲直蹂躪之使急
 攻之森嶽巖邑也進則路不能並數騎隕則馬斃泥淖中監軍勝一
 軒曰彼負岨我侵矢石是吾自招死也死而無功將焉用此伺間而
 動見不可而止軍之善謀也不如固壘乃止公怪其不進使行人精
 內問之精內詐矯君命激軍士曰汝等何首鼠之甚也今日之事有
 進勿退勝一軒嘆曰進乎是吾鵠身也止乎君謂吾怯是君命吾死
 也乃進公亦進矢石如雨至斃者相屬乎塗公猶奪傳於森嶽公之
 將進也使後軍改列師徒亂薩分其師爲二隊一支前軍一從間道
 乘亂突其後後軍敗已萃于公軍公軍太敗公退閱其士存者僅三
 十餘人公嘆曰余自結髮數十戰未嘗厄而今斯至豈不命哉乃下
 馬將自殺薩師兵走來而見公下馬曰吾知公將軍請奉將軍首公
 瞋目叱之薩師群辟易却走數十步願其人曰天亡我哉乃刎而死
 於是薩人以公頭歸已而薩侯使奉公亢歸諸西肥世子政家集郡

臣議改葬鍋島直茂前曰臣子之於君父孰不敬且愛而委之仇讎
 之於手恨孰甚焉然臣事君久矣從君大小數戰所向無敵所當必
 摧而一旦卒然隕亢於藪爾偏師公之義列豈不切齒扼腕弗然吞
 恨哉今縱愛而葬之君之靈將不安地下不如它日堂々之軍奉木
 主發武關逞志於薩而後改葬焉世子然其言乃辭薩使薩使復以
 公頭而南過高瀬川則旣重奉者不能勝薩使以爲初公之與我爭
 肥割高瀬川以西爲西肥南爲我是以公之神不欲出其區域乎復
 命於介薩侯迺使有司營窀穸之事天正十二年三月二十四日葬
 於高瀬驛願行寺蓋其塋域偏狹但建一片石耳吾黨矢住匡由之
 先家村者以善射寵於公從軍屢有功因賜氏矢住匡由篤厚人也
 以其先之故慨公之塋域蕪壞堙滅而殆類黎庶之墓捐貲立碑而
 謀誌銘於余於是余公之所以起與其所以敗誌而銘焉曰
 天耶人耶勇耶知耶公之起何其勃爾其敗也自敗之也非敵奇也
 嗚呼公有子哀哉不得永其祉而能保其祉有若鍋島侯

北山處士黒木正方謹撰

矢住家村九世之孫矢住匡由謹建

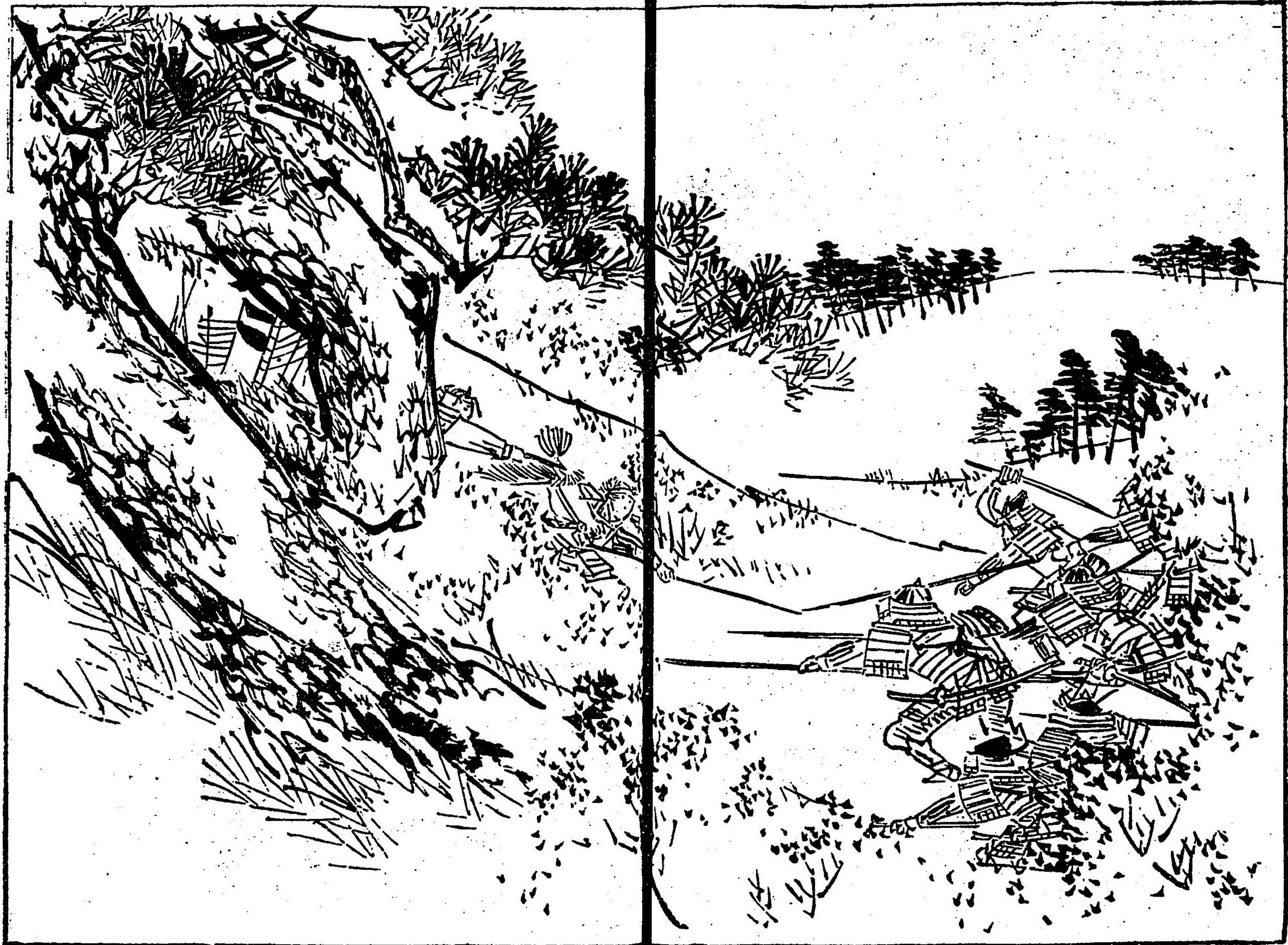
抑昔時天正十年頃肥後州八代の邊まては本藩の御領分にて吾公之武威盛ある事之朝日の彌榮昇るか如く近國の大小名風を望て麾下に属しまるらせける爰に肥後國高來郡有馬の城主有馬修理太夫鎮貴と申せし之藤原純友の後裔にて累世此地に封せられ深江鷺野千々石森山諫早等の諸壘を併領し日野郷の城におはしける素より吾藩に好を通し給ひ今之旗下に參候おれ之太守にも御親み厚く懇に歡待し給ふ然るに同國中佐賀の城主龍造寺山城守隆信といへる人本之微々しき躰なりしかども近頃隣國四方を伐從へ其勢ひ既に強大に成立ければ動もすれば鎮貴の領内を剽掠して深江を始め五ヶ所の城主も皆隆信に降參してけり其上赤星か二人の子を隆信方に質人として遣したるを薩摩方へ志を通する事の奇怪さよと赤星の子息姉と男子を肥後と肥前の界なる竹野夜原といへる處に生磔に行ひける赤星某は是を聞て憤悶に堪す齒を切り腹を

斷なから小之大に敵し難く空敷怨を吞て物憂月日を送りける鎮貴之元龜二年の夏養父の義純に後れられ既に十八歳といふに此等の慘毒を聞なから助け援はんとするに亦力の足らざるを歎きつゝ、利隆信既に大軍を促し有馬表へ襲ひ來るべきの企て頻なりと佐藤小三郎といへる者注進しけれ之太守義久公に援兵を請奉り御評語ありし程に今年天正十年壬子十一月十九日鎮貴より家臣本多右馬之允島原肥前守を薩州鹿兒島へ遣し迎ひ船をまゐらせらる此方よりは川上上野介久信を兵將に命せられ清瀾を出帆して有馬へこそは推渡たる此時十一月の初旬鎮貴之隆信か千々石の城を攻屠り敵三百餘人男女奴婢數しらす生捕つ同十一日には肥後の日比良の城を陥れ城主小森田某を斬て勢漸く振はんとせる由十二月五日鹿兒島へ告來る又翌年五月廿六日に又々使まゐらせて去六日深江安徳の兩城等も先非を改め歸參仕らんと訴へ候し間吾兵衆を彼地に入部させ召置たり然る處に深江の城主再以前約を變改し有馬の兵を拒み往來の道を斷切し故安徳の守兵等甚難儀に逼れり急き御加

勢を給れかしと使者を以て注進しければ義久公聞召て御出馬あるべきに窮り先づ新納判部大輔忠堯川上左京亮忠堅以下に高木郡安德城へ差遣さる安德城主并鎮貴の一族等大に悦び各酒肴を携へて海邊まで出迎是まで渡海の軍勞を謝せられき時に深江島原は隆信方にて晝夜緊しく用心しければ兩人以下も曠しく安德一城を守り居たり義久公は六月二日御出馬の御催し兼ては窮め置られければ共其後高木在陣の御方追々敵陣を打破り連に勝利を得る由聞えければ暫く御延引あり然處に六月十三日新納忠堯深江の城を攻めんとて戦死致し川上忠堅も痛手を被りて御方尽く安德城に引籠隆信方彌々逆意を振ふと聞得ければ同年八月下旬義久公の御舍弟日州佐土原の城主島津中務太輔家久を惣太將とし同國宮崎の地頭上井伊勢守覺兼を副將と定め給ひ有馬の地へと進發し肥後八代の地頭平國美濃守光宗をも吾手勢數百人引具し是も有馬へ出陣あり明れば天正十二年二月廿六日龍造寺隆信大軍を靡して中佐賀を打て出合志の城を侵掠の由熊本平土より羽檄を飛して急を鹿兒島へ告た

りければ三月九日義久公御太將にて薩隅日の銳兵を引領し同十六日肥後佐敷に御到着あり此地に本營を居させらる同十九日舍弟佐衛門尉歳久祁答院より着陣あり翌廿日には兵庫頭忠平主八代より來謁し給ひ廿一日は求摩の領主相良四郎太郎忠房同弟長壽丸を伴ひ伺候あり今日中務太輔家久太將にて其子又七郎豐久川上上野介久信同三河守忠智其子左京亮忠堅平田左近將監遠宗同狩野介宗應同孫六宗位新納武藏守忠元同治部少輔久厚山田新助有信鎌田出雲守政近河田駿河守義朝高崎大炊介能廣奈良原安藝守延二階堂帶刀長重行鯨島又衛門尉等を一手の主將とし有馬の如く發向す時に肥後の上津浦上總介栖本上野介志波兵部太輔麟宗大天野某等も亦御方に參上あり島津又四郎彰久島津圖書頭忠長平田美濃守光宗等も馳付て來會し上原長門守尙近は彰久の陣に加りて薩摩方の軍兵一千五百餘人都合其勢三千餘騎肥前の有江といへるに一夜の屯を張て直に深江を過り急ひて安德城にそ入にける幾程もなく進て島原に出張し柵を振り營を構へて使僧を敵城に遣し申贈られけるは速

に弓箭を弭て和睦の好^{よし}をなし有馬家に降参し兩國水魚の交を致さるべ
 きと長久の上策と覺ゆるやとぞ云はせける隆信使者の趣を聞て大に怒
 り吾をして有馬に降参せよと之言語を絶せし奇怪^{きくわい}さよ島津か救ひの小
 勢共只一揉^{もみ}に蹈^{たふ}禿^{かぶ}さんと頃は三月廿四日肥筑豊の甲兵六万餘騎雲霞の
 如く前後左右に相擁^{あひまみ}へ旌旗^{せいし}山を蔽^{おほ}ひ鎗矛^{やぶこ}天に輝き坤軸^{こんじく}も轟^{とどろ}く計に寄來
 る敵と御方の衆寡を譬ゆれハ九牛か一毛にも及ばず大海の一滴ともい
 ひつべし隆信か競ひ掛れる形勢^{かたち}は鼓^この小雀^{こすずめ}を驚^{おど}熊鷹^{くまたけ}の掴^{つか}んと飛^と毬^{たい}毬^{たい}るに
 異ならず然とも太將家久は義を善道に守り籌^{はかりごと}を方寸に懐^{いだ}く良將たれと
 小敵を以て侮らず多勢を見て畏る色なく兼て陣中に號令を出して申さ
 れけるは此^{この}度^{たび}太守公有馬氏の援兵として我を擡^{たか}出^だて三軍の師命を司ら
 しめ隆信か猛勢の先登を任せらるゝと家の面目世の聞へ時に取ての高
 名なり各心を一にして肥前の地に屍を暴^{さら}して芳聲を千載に流すべし若
 生んと欲して敵に後を見ん笑を他邦に招かは薩州の恥辱ならせと申渡
 し又息の又七郎を近づけて今度の合戦敵は目に餘る大勢なり御方一人



にて二十人を討取べしと有馬に誓を約せり汝既に志學の齡を迎へ成人の徳を踐つべし鴻毛より輕し敵陣に陥るを以て生涯の忠孝と存せよと教訓し薩摩勢の駕來し軍艦を盡く修繕させ瀼沙背水の圖を示されける程に一軍の將士之が爲に激昂し勇氣一入奮發して一人も生て歸らんと思ふ者こそあかりける特に息豊久之世に類なき容貌美麗なるのみならず智勇卓犖たる少年なるか眞先に馬を躍らして進まれば相従ふ壯士共又七君打すな我後れしと互に奨め勵まして鬼神も挫く勢に乗しければ之川上上野介相良四郎太郎平田美濃守この偏太將も之が爲に英氣を彌長して我先にと島原表に馳向ふ時に河田駿河守衆軍に向て申けるは今日御方の運氣を望み見るに殺氣天を衝て直に敵の太將を討取べきの吉象あり各勇んで功名し給へ打や者共進めや兵共と今朝辰の刻より午の時まで息をも繼せず攻戦ふ聞聲矢叫の音は百千の雷の只一度に落かゝるかど疑えれ敵御方の劍の刃鎗の鋒に交る光は秋の電の雲間を泄るが如くなり薩肥両雄龍虎の争ひ未た何れと勝負も分たざるに森嶽より

豫て相號の海螺を吹ければ時分は好どと逆瀬川奉膳兵衛尉前田志摩守
 四本主税介以下百餘騎一陣の暴雨の尾花か末を偃か如く一度に哄と喚
 て隆信か旗本に横鎗を入れ濱邊の様に突て出れば奉膳兵衛主税介は右
 より左縦様横様に衝通り爰にて討死したりけり同時に森嶽よりも有馬
 勢討て出たれ之敵軍前後の兵を防ぎ兼右往左往に散亂せり隆信大の眼
 を見開き味方は大勢敵之小勢穢し引などあふりつゝ備を立直さんと身
 を揉て下知するを圖書頭忠長透す進て手痛く突立れば隆信再ひ隊伍を
 整ふこと能はず適山の手より小返す敵をも鎌田政近二階堂重行餘すな
 洩すな只引包んで撃て取れと采配を揮て指揮すれ之又一方より新納駿
 河守久永九郎左衛門一足も去らず蹈留り引組く討死を遂て敵陣に詰
 入れ之上原彦五郎宮原越中守長谷場兵部少輔宗純竹内備前守はよき敵
 を打取て分捕す山田新助稻留新助上原長門守各勵しく相闘ふこと今朝
 辰の一點より既に未の刻に及ひけるさしもの隆信か六万餘騎も薩州
 勢必死窮めし盡日の合戦に撓まされ兵力憊れ泥み弓折れ矢盡て肥前を

さして敗北す大軍の崩れ立たる癖なれば太將隆信何地にあるも辨へず
 落行味方を黒崎某大音揚げ殿は此に御座するぞ急ぎ馳來て守護し奉れ
 と馳廻く下知をなす時に川上左京亮は敵軍の中に紛れ入好き敵もが
 奇と伺ふ折節黒崎か呼はる聲を聞付て掌の中の珊瑚の珠と小踊し殿を
 何處へましますやと尋る振して馳入れは近習の者共味方かと心得違ひ
 殿は其處へと申に付隆信聞て何者ぞと立上らんとする處に走り込て鎗
 擣けるを築瀬兵衛門尉万膳仲兵衛尉出名五郎兵衛尉馳續て隆信の首を
 打落す又森勝一軒は隆信か軍師として先陣に進みけるを曾木權之介重
 正是を打ち又七郎豊久も強敵一人を斬取らる於是彰久忠長久信光宗忠
 元有信政近義朗の諸將以下勝に乗して肥前勢を尾撃し勝負最中に一人
 の武者太刀の鋒に首を貫き家久の旗本に來りて是を見よこれを見よ今
 日の勝利之吾に在りと家久の妻手につと來り急に家久を刺んとす家久
 敏捷太將なれば弓手に向ひて閃と踊下り忽その武者を斬殺す是乙隆信
 か部下の士に江利口正右衛門てふ有名の者なりけり又猿渡越中守信光

は鍋島加賀守直茂が百騎計に打なされ引て近づくを附込て追討す此時
 二男與二郎享年廿二歳戦死す此日討取首級三千餘級御方には上原勘解
 由左衛門尉養田直左衛門尉貴島刑部左衛門頼辰島津忠長が臣稻留左京
 森讚岐稻留内記長濱右衛門等討死すさて義久公之肥後佐敷に御在陣な
 れば同廿六日諸將凱歌を島原に執行ひ隆信が首を佐敷に獻して公の御
 實檢に備へける忠平主歳久各御前に降跪し給へは公床机に御て合掌觀
 念し給ひつゝ御實檢の式終りて後隆信の首を肥後の高瀬にそ贈り歸さ
 れける今日公は八代に至り平田光宗が旅舎に御次わがりて四月十九日本
 藩へそ御歸陣ましましける然るに有馬神代城未だ降服せざる程に四月
 朔日伊集院忠棟上井覺兼鎌田政廣白濱周防守重政を有馬に遣され同七
 日諸將神代に入着し種子島左近太夫久時兵船三十餘艘を浮べて神代に
 來會す同九日川上三河守忠智伊地知伯耆守重秀森山に適て有馬鎮貴に
 告まらせ深江安德島原三重の諸城を守衛しぬ同月廿二日に有馬鎮貴
 悉く其舊領を復へさる又鎮貴の請に因て同五月三重島原の両壘に島津

薩摩守義虎種子島左近將監久時川上左近將監久朗吉田清存を以て鎮衛
 に居しめ給ひ同十三年二月有馬鎮貴自ら鹿兒島へ參府し於御内義久公
 へ謁見わり種々の獻品美盡し善盡しなり其中にかはんと云ふ藩國の雨
 衣あり是吾藩にて始て合羽てふもの始なりとぞ聞へける抑有馬鎮貴
 は公の援兵に頼て鱒敵龍造寺を滅亡させて他日の宿憤一時に散するの
 みならず先祖重代の本領を安堵せられしかば國中の上下萬民薩州の大
 恩山より高く海よりも深し子々孫々に至るとも此大徳何を以てか報謝
 せんと感歎せざるはなかりける西丹外日記に川上左京隆信が首討取て
 高聲に名乗ければ敵は是を聞き十方に暮て刀を落し敗北す御方に之勝
 時を揚げ勇みかゝつて一人も殘らす討捕へき由下知致し三江田比良村
 といへる所までの間手負せし雜兵幾千万と云ふ數を知らず其時晴信家
 久に向ひ肥後國殘らす攻取申すべしと申されしを家久尤には候得共今
 朝よりの合戦に諸勢勞れたるのみならず討死手負大分の事にて剩さへ
 心變せし五人の者其外小身なる者共にも數多有之由先づ此者共を打捕

られ可然や大敵を小敵にて長追致し自然返し合働たらんに御方疲れて候得は心元なく思之れ候年來心に掛られたる敵の大將を被_レ打捕_レ御本望無_ニ此上_一候跡の事共心元あく候へば先是と止られき

○肥前島原出陣

寛永十四年冬肥前天草郡島原の郷民等名を天主教に假て乱を作し原城に楯籠_リ近國の騒動大形ならず江戸在府の諸大名より島原へ切支丹_トも籠城_{爲_レ仕由_ニ}に付一方の攻口被_レ仰付_ニ度と取々願書差上られし此時光久公御在府にて島原の一揆共成敗被_レ仰付_ニ候様との御内意被_レ仰出_ニしかば辞令もこそ有べし尤の御願と當時評判宜しかりしとかや扱隣國の諸侯して天草の賊追討せらるべしとて光久公にも急き御下向可_レ被_レ成_ニに究りけれ之江邸の御長屋中喧擾_ヲちて壯者の者共之我こそ島原の先登して他國人に薩州勢の手并_ノ程を見せんす者をと口々に勇み驕りける去るを市來惣兵衛と申者一人は默然として何たる異論も申さず公既に御發馬にて惣兵衛も御供し島原近く御船参りたりし時惣兵衛何れもへ此節原

城への御合戦先登に進まるべき御談合江戸に於て承居たり然れ共其節迄は落着致されざる事の候て御同意とも申さりき今に於て之各御人數にかへられ給るべし随分先登の働可_レ仕覺悟と申ける頼_テ御船島原城下を御過遊はされし時は公黒葛原某へ八刃の鉄砲持参候様被_レ仰付_ニ差出候得者二筒程原の城へ御放_シし時其彈丸城の屏に當り候とあり然れと爰より城迄如何程と申問敷も大抵推量しられぬ時に黒葛原某進出て申上しは御暇を下され候は、先手に相働申度との願なり然れ共御許なく矢張御側に必_ニ至_ニと御供仕り首尾克_ク御國許へ罷下申事御奉公との御意あり然所に上使松平伊豆守信綱より御國許にて中納言御病氣御危篤の由にて早々御下國候ひて保養可_レ被_レ成_ニとの上意を演られ無_ニ程_一御下國被_レ成扱又御國より之島津下野久元三原左衛門重庸兩人を島原表への御使者として差向らる重庸は伊集院の地頭を領せし程に追々伊集院衆中島原へ出陣すべしと觸たりしかと早雄の壯者小躍して勇み喜ひ既に出發し伊集院路に打臨み街樹の下枝どもを援打に伐折なとし天草の百姓原か頭

刻くれむすよと力足踏て只驕に驕ければ其荒元氣目さましく制し兼て
 を見へける出水米津より船出して肥後の沖に至れば東北に雷の震ふか
 如く殷々と鳴音類にす船中の壯士船子に向てあの轟く響は何の聲ぞと
 問ふ船子共櫓押しし、愚にも仰候者哉われこそ島原城の鉄砲石火矢の
 音候よ御身達はあの下に的になりて立るゝ者をと申ける則ち三隅海門
 に漕出して船子とも最早各もかまへて用心めされかし鉄砲の斜銃など
 来る事の候と言ければ誰か着初むともなく胃取出し、頭に被り俄に胃
 得出さぬは船屋形に這入などしつ今迄高談せし聲もひつそりと止しと
 あり進むこと疾き者と退く事速なるのならひにて平生の時に戦場の功
 話を疊の上の軍學者と云ふ島原出陣の者共始は勇にして後に怯き今日
 の事之に類する者多し公黒葛原か前鋒を制し給ひ市來某か卒に先登に
 與せざりしなど持重の遠慮と云ふべきなり寛永十五年正月島原陣御加
 勢軍衆賦に惣勢五千七百拾四人内三千三百六拾人を一番立とし二百八
 拾壹人鹿兒島士二千九百五拾六人外城衆中百貳拾三人御道具衆又二番

立外城衆中二千三百五拾四人并一所持家來同年二月重御加勢人數七百
 三拾六人内百六拾六人鹿兒島士六百廿人外城衆中と見得たり或か日當
 時は諸郷士も速に出陣も出來し故伊集院郷士あとか勇み驕りけめ今の
 兵農分ち難き躰ならば最初より三隅海門の形勢ならんと物語られさ

○大立公朝於大家且親臨萬機

太宰純紫芝園漫筆曰憲廟視朝常晚元祿中薩摩侯綱貴入朝日
 出造朝近午憲廟未出視朝薩摩侯請執政見曰綱貴入朝今日謁
 見上早造朝而上未見臣得非憚煩乎臣請辭執政曰然近日上視
 朝比昔時少晩而君早造朝宜其以爲淹也雖然君但須焉上今且
 視朝薩摩侯曰臣等注留都下期年今日不得見上尙有他日不可下
 以臣等故煩上因請辭遂起將出執政固留之薩摩侯乃復座執政
 以告憲廟遂出視朝以憲廟之威嚴也當時諸侯猶有下倔強如此者
 謹按純去當時未遠故記得斯事實抑吾公英邁德量不憚憲廟之
 威嚴恍慨吐露直言仍得使大家速出而視朝於斯一事亦可以知

公固悦^{ヨク}道理^{道理}而不^レ爲^ニ外物^{外物}所^レ奪^ハ之^也賢^也也。主將三鑑日島津綱貴は近代の良將也且今の侯伯悉く國初の新家たり封建の大名と稱すべきは唯島津氏而已と於^ア戯^ハ公仁にして且つ勇其政一日萬機親臨^シ之^ヲ思て得されは食を忘れ己を虚にして赤心を民に推し給ひ國俗敦^ク樸^ク庫府充實を致せり嘗て之を聞く大玄侯の御時播磨に盤溪和尚とて名高き大徳の侍りて遠近の僧俗仰慕^シけり候一日經過^シて盤溪に見給ひ禪^ノ説^ノの要旨如何か是一言以て終身の覺悟^ニに^トなすべきと問せ給ふ盤溪對て申上ける^ニ大藏經の數萬言も攝取^スべきと唯煩^ヲ去^ルて無欲に如^クものはなし煩腦を去り無欲に^テあるは此身を捨ざるの境界になる外はなき事に候と申ける侯扱は佛法の要旨如此なるに止るべきや人欲を止て天理を存せよとは儒者の常譚^{ナリ}然共欲てふものも人心に生れ付たれば是も天理の外からす人間欲^キく^ンば士以下の者は産業を勤め身命を働すことなかるべし唯善惡の境を踏分けて私意に陥らす禮義を失ざるを士以上の徳と云ふ命を捨る^ニなど^ト武門の覺悟^ニに^テ珍^シからすとて其後は相見給ふ事もなかりし

とぞ此候^ニ御力^ヲ飽^マせて逞^シう座^ニ在^リ極^メて槍の技好^ミ給ひし大なる槌槍も竹竿の如く自由に弄^ハせられ入身^ナと衝^セ給ふに入逼^ル侍^ル時うんと計りそが手本^ヲを抑^ヒ給へは入身の者堪^ラへず押落され押倒されけると申傳ふ斯くして御仁愛の心勝れ給へり藩に大辟の者ある日は金城を避て輒^リも常盤谷の別館に出座^シつ朝膳をも聞し食す憂傷がらせ給へり故に四方心を歸し奉り諸臣庶も寅畏^テ各^ノ徳^ナからん様に職を奉^ル職^ヲける又公何事も自ら朝政を聽し召れ晝夜御心を勞^ラせ給ひしかは或日公常盤谷に臨^リ止^シて御一宿成され明日^ニ朝政聽し召すべければとて御急^ニ給へる時有川設樂介御側に候ひて申上けるは御前には日夕惕^ル若て御用の事何篇自ら成され候得^テ御心氣も憚^レ給ふらんと恐罷在事に候わこれ十事の御仕置の中小事七ツは執政へ委^ラられ大事三ツを上聽召られ度存候由願ひけるを公夫程の事知^サるにはあらざれと政の善惡は主君一人の心に在り執政の知る事にあらず又執政も吾より賢^ノのみあらばこそ委^トもしつべし若や執政一人の行届^スる事あらは千萬人の迷惑に掛らんかと憂念

ふこそ結句心を痛ましめて必氣を勞かすの本なれ汝か孫の五郎にも定て親分の者をも頼むべし其親分には正直律儀にして氣遣をしと思ふ者をこそ頼み可申夫にても孫之何氣遣せ不存哉と御意成され扱我は三國の主人と生れ三國の父母おれは三國中の人を思ふと汝か孫一人思ふと之大なる氣遣と云ふべし夫程七拾萬石を我食國と治する之祖先の遺澤莫大無邊の事あり扱七拾萬石の預り主とあり其取扱悪しければ千萬人平均ならず預り主の事何とか思ふべき文祿中細川幽齋豊太閤の命を受けて田租を量れりし時大名は田祿多く持たるを貴とすとて少しの閑地なく竿を入たれば他邦の五拾萬石其實は百萬石を有と同日の談あらず況や西藩東邸糧を千里の遠きに輸すのみならず離亭別莊産を分ち制を同じ子弟男女聚り食ふもの其冗費幾千金を測らす剩へ大家巨室に分地を別封且は魂殿に施入し公室の食地歳々に減し太平日を逐に隨ひ府庫空虚して以て兵を足はし士を富すこと叶ふべからず因て有士等に仰せて七拾萬石と思ふべからず常に四拾萬石の大名と比肩して貳拾萬石の支

度を致すべし諸人身分と家祿と抗衡すして物する程に果は困窮して進退なり難きに至る皆其分量を揆らざるの過なり昔龍伯公は天下擾亂の砌なから拾萬の御藏入を以て軍役を進退なさしめ給ひしとそ有司等儉素を尚び奢靡を禁て民をして忠淳平均の情を失はざるを專要とすべし民心忠淳平均ならざれば政綱蜜なりと雖も富る者は益富み貧しき者は彌貧しく此より姦諂の風を扇きなして上の貨財を竊み私の利を射る者絶ることなく上下實を露さす當座の理を演て久遠の計に疎く終に治定の日あるべからずとて何事も親ら政事に心を用ひ給ひしかは府庫の財なとも洋溢て東叡山根本中堂の助役に巨萬の費弊れはせしかとも同じ山中に山王社さて別に創建しまゐらせ給ひ猶物の數にはあらざりしとそ

○伊集院俊雄進講并阿姊相良氏潜居

伊集院俊雄之俗稱仁左衛門其幼時家極て貧し自ら春き耕して親を養ひて薪水の勞を竭し艱難辛苦の中に成人て書を讀て大義を通せり人たる

儀表忠直始め郡奉行となり百姓を郵み意を農圃に注て頗る治績あり遂に擧られて慈徳公の輔傅となり匡順する所甚だ多し嘗て浪華守郎を歴て掌務官に至り初め侯の命にて大學の講釋を申上し其時分まで明德を申すは天子の德行を天下に明に照させ朝日の廻く様に天子を難有かり奉ると云ふ古義の意なりしにや扱至善に止ると云ふは何なる譯かと御問あり俊雄對て申上けるは惣して書物とて何ぞやかましき事にて無御座候至善は到て結構ある事にて先づ御國主おれは御國主の結構なるほどく、に應じ御身持を被成日月雨露の御惠みいづも間違ぬ様に國民へ普く行渡りて治め給ふは則明德至善の事にて又我々敷のものは夫丈の勤向身持を大切に仕りて分限を過さす上下に向ひ陰日當なく相辛苦候か善にて候勿論惡をせぬ者を善と申候扱人の身の上に至惡と申にてはあく候得共何か申分是あるは至れる善とは申難し御上たる御身としては就中諸人の手本におはしまし候程に明德と申御身持を諸人難有かり下へ迷惑仕る者無之様に御心を配らせらるるを明德を明にし至善に止

ると申事にて候然共箇様に申上る私か直に左様の事罷成る身にて無之候得共人より教へられ漸く承置候と申上られしかば候左もあるべしされば大學の一章此至善の意味にて大跡知れたりとの仰なり此俊雄の姉は相良某に偶して十九歳の時夫の相良某東武の勤成にて身まかりぬ姉の歳まだ廿にも足らず剩子なき身なれば改醮せまく勤めける姉固く辭て昔より婦人は貞節の一をたのみ操とはすなれ我は又一子もあけれを再嫁せしとて理に背くにたあらね共吾は我本心より再び嫁くの志なしとて自ら縁の眞髪を剃下し十九歳といふに尼となり俊雄に寄留にて潔居しける年古稀の齡まで存へ在しにひとせ近所の新屋敷に火起りて夥しく延焼ける尼は水を汲む鉢にて門に立出錦の囊を手に捧て何地へか避さんとせし折しも門前を賊の通りかゝり尼の錦囊を見てこは能き得物御座るおれと尼に向て欺けるは斯る大火に年老の怪我ばし仕出し給はんいざいせ給へと引負てぞ立出けると或る暗がりに至り尼の錦囊を掠め取り披き見てければ香の煙に煤にすゝけし古位牌のみぞ入たれ

賊も忙あせて打捨けり即亡父の位牌にてありけり後に賊は捕とられて罪な
 れしあり又或人此老尼に申けるニ尼御前ごんいと稀古の齡を過とじつ剩まへ笙しょうの
 窟いほやの聖せいともいふべく廿に足らぬ年寄としよりのの寡居ごりすまなれば今は他欲の氣は根か
 ら絶たられしならんと戯れけるに尼聞て勿躰むつたいなき事を云ふ人哉畜生はい
 ざ知らず人間の性を受し身の戀の情絶て一日も生きて居るべきか其
 方たの手の指を只今切て試られよ血か出ましきやは指より血の垂るうち
 は戀は忘れらぬものと眞顔まかほにて申けるとかや

○孝子正右衛門

或人の云ひしと女子の嫁をとつきと云ふは跡繼あとつぎといふ言なり婚姻こんいんは子
 孫相續の爲なれとなり天子の皇太子を日嗣ひつぎ御子と申奉るも日種ひたねの神胤かみたね
 天あまか下したを統御しゅうごし萬民の貢みつぎどのを受納うけいれさせらるゝの御本意ごほんいより云ひ出せ
 る實言まことなり扱諺あつかひに親の思は子に報むかふと云ふと父母の娛事たのしみごとか種となりて
 此身となりし迄いたならば天氣を受けて地に物の生育そだちか如く恩とも愛とも知
 れざらましとも襤褸びんじの中より守養まもらさるゝのみならず成長に従ふ程惟吾



か子の幸々善れかしと日夜に案し思ふ親の心盡しは西の海原の遠深く
富士の高ねの仰きても及びつかぬる如くなるを其子の親を思ひ敬ふは
人の親の子を思ふか至極あるには及ばざるあり夫故に其子を思ふ恩愛
の繼々に傳るか親の恩之子に報ふ也といへり然とも上天子より下庶人
まで子の道は同じ理にして其孝を行ふの次第は各其身分相應なる事わ
りて吾身を持損ぬか上下に通して第一とす吾身を持損ぬといふ事
其身分に就て云はゞ至て六ヶ敷事おれは色々昔の書物など讀せぬ
れとも何れ書物計ても濟まず善人と朝夕に交りぬれば薬となる又薬も
大事の物あり吾か身に聴と計思ふても實は身の毒となる事もあり此能
毒を味はされば却て害を引出す是を良かるへしや彼は悪かるべき哉と問
ひ尋ねて人の慮見を借るとを專要とすと云へり扱本藩孝を以て聞か
し者之文徳天皇の御時提前の孝女福依賣を首唱とせり此時天皇遙に福依
賣が草野の女子にして二十餘年父母に孝養して又曾て憂情らざるを聞
召し及ばれ仁壽三年賜爵三級終身旌表門閭と見たり爵を賜は即

祿米を下行し給ひつる事にて旌表門閭とて孝行の次第を記してその者の門に立させらるゝを云ふ譽は上州街道などの民家の戸口に孝行奇特者の名を記し褒美を取らせらるゝを木札に書付らるゝか如し扱仁壽以來は戰國となりて大隅の隼人薩摩の氏長か輩敏勇膂力を以て稱せられ忠臣孝子の其門に出る者青史に載たるを聞す昇平百年時文明に属せしより農夫市人孝義を以て世に稱せらるゝもの比々絶す本府の賈豎池田正右衛門なる者寶永四年十一月公の御褒美蒙りて宅地一區を給り後に碑を樹て其行狀を畧記す然とも鄙野の文章和漢の語言にうとく龜井道濟なる者此地に遊べる時此碑を讀て嘲りしことあり其和文詞に曰大なるかな孝の徳たる正右衛門は鹿兒島惠美須町の價人あり孝行を以て名を州里にあらはし士大夫の爲に恭敬せられ遂に邦君の褒美を蒙る世人孝行を以て其名に冠し其宅地に名つけ橋に名つけて今に至るまで相稱す大なるかな孝の徳たる事人死して名存せざるもの幾許萬人そや天下誰か父母あからむ然して正右衛門名不朽則千載不死といふべし嗚呼正

右衛門獨何人そや謂ことなかれ我不能と是を勤て不止ものは習ひ性となる夫孝は以て忠を君に移すべし身老親死て後悔と雖も及ぶべからず勉めよや人の子たる者如何にも此文にては和文とも漢文とも知れず又孝行の始末も詳ならず碑を立る程なら之他國人の見て笑はす又俗人の見ても事の分る様に有度もぬなり然とも此正右衛門篤實の志今に通りて其名を稱するのみならず築地に渡したる橋の名をも孝行橋と唱へられしかば其比高岡の某か

幾世々かかけて朽せしほどの子の道しある名は橋に残りてと詠たるか如く正右衛門は享保九年四月に身まかりしかとも今に至りて多くの孝子の中にも正右衛門は獨其美を繼にす

○義天公當正統定國家

義天公と申奉る之高祖得佛公より六代に當らせ給ふ氏久公第二の御子御母之佐多忠光の御女にて永和元年に御誕生後に陸奥守久豊公とそ稱し奉りける御年若かりし時は額娃郡四十町を給りて南殿と申たり先君

氏久公は御舎兄師久公と互に水魚の交りをなされ御兄弟心を一にし力を戮て三州の動亂を平定し給ひ外邦の侮を禦がれ給ひしか師久公の御曾孫久世の時に及んで天下の叛盪打續きて義天公の御舎兄恕翁公と應永十八年久世の干戈を治め給とんとて山東清敷(今の入來種脇)を出陣し給ひける時御病に侵され給ひ鹿兒島清水城に御歸陣おはしまして今年八月六日四拾九歳にて御逝去なり此時伊集院彈正少弼頼久といふ者あり其出自を尋るに二世太守忠時公の第七男大隅五郎忠經と申せしは御連枝の中に勝れて御心も雄々敷おとしければ御父忠時公より伊集院に於て所領を給り三世久經公の御時蒙古の賊と戦ひ軍功を抽でられ後には常陸介に叙任し京師關東に於ても高名を顯されたり忠經に四人の子あり長子三郎左衛門尉宗長は鎌倉宗尊親王に仕へて進士にて身を終られ次男を三郎兵衛助忠繼と申ける伊集院の内町田村を領知し三男五郎太郎忠光は同所石谷邑を給りて後には兄忠繼の統を受られたり四男は侍従房俊忠とて山伏なり俊忠か子息圖書介久兼代に同所古城村を領

知しける然に久兼か三代の孫助三郎忠國に至り近村他郷を打靡け勢い何となく強大に成しかは奢侈の餘り五代の太守道鑑公に叛きまゐらせ諸所にて敵對して合戦しぬれと後太守に降參して猶伊集院の地を有ち居たり加之忠國か女を氏久公の妃とし給ひ恕翁公を生しまゐらせ給ひぬ頼久公は此忠國か孫なりしを恕翁公の御妹を尙したれば是より伊集院は外戚の權彌高く勢まうて國の柄を乗りて何事もおのか思ふ儘に振廻つゝ猶も飽足らずや思ひけん恕翁公に梅壽君とて唯一人の御男子侯を誘ひて出家となし奉り祖父忠國か子の石屋和尚か弟子となして仲翁和尚とそ申ける又八人の御女子侯をも七人は悉く比丘尼の女僧とあしてければ恕翁公には御子有ながら御出家同前の御身ととなり給ひけり去程に恕翁公御逝去なりければ御世嗣の事頼久か子の伊集院初犬千代に御遺言と世上に披露し御家を取奉らん構たりざるを時の執事吉田清正等肯せず態と様々詮議を延しつゝ其時義天公は穆佐の高城に藩離の守護としておはしけるに急きて此一大事を告奉りければ義天公夜

を日に繼て鹿兒島へ馳來り給ふ折しも伊集院頼久か從類とも其子初犬千代を押立て石屋和尚を引導師とし恕翁公の御葬式を營み初犬千代に公の御位牌おひを捧げ持しめて六道廻くわだうまひの最中なり此時義天公會釋あしやうもあく押入て初犬千代を押倒し捧げ持たる御位牌を御取なされ御葬式の難かたく濟てける去れば伊集院か一族共は面目を施し御家奪はんと企たりしをも義天公の御供奉に之執事本田信濃守忠親同又二郎を初とし佐多伯耆守親久樺山末弘なんと一騎當千の老臣勇士御後に従ひしかば皆すばくと伊集院へそ引取り是より伊集院は彌御家へ對し偏に謀叛結搆の外他事なし然とも義天公は正しく公の御連枝といひ智勇兼備りし英將なれば三ヶ國の面々も推て太守公と仰き奉り八代の御世嗣に備らせ給ひけるこそ目出度けれ伊集院頼久は己か不忠の心をも翻ひるかへさす却て總州家の久世君と黨を結び義天公の御中惡しく言なしければ是より山北四ヶ所は總て御敵となり立て久世の御子守久を北殿と稱しける天に二ツの日なければ國に二ツの主おんおとさぬ理なり況や義天公之既に八代の

太守に御備り御元祖以來傳國の寶劍あしせん愛染明王の尊像まで御讓を受給ひたるに伊集院か反逆に烏合うがの衆瓦鳴の輩所々に蜂起して大隅菱刈郡の凶徒等御味方申さぬを退治し給はんとて比之應永廿年冬十二月と申に鹿兒島吉田まで御出馬ましければ吉田の領主吉田若狹守清正蒲生の地領蒲生美濃守清寛等公を迎へ奉りて響應して様々公を慰めまらせ此折節伊集院頼久は公の御出馬を聞付て屈くつ竟の時なりと大に悦び清水本城の城門を堅めたりし門番に金銀を幣へいなふて内通し十二月七日の夜に紛れて伊集院勢清水城に亂入しける公の御留守に候ひける北原彌二郎同太郎三郎等は御重代の御寶物を警衛して候ひしか眞一番に切て出て伊集院勢に落合せ追つまくりつ時移るまで防戦ひ爰にて二人を打死す相續ひて伊佐敷三郎九郎忠豐あまた天辰式部二郎伊地知新左衛門季兼なと毘沙門堂の前に折合せて敵を入たてと火花を散して散々に切むすふと雖も多勢に無勢掛も合手あひてと爰にて殘らす戦没せり伊佐敷忠豐享年三拾三歳主從十一人同時に戦死とぞ聞きわたり爰に遠矢某といひし者本

乙さる者の子孫なりしを其心操眞直にして上にも下にも阿り諛えずし
 て時に遇かたたく空く芥子推か怨を抱き刺へ此度公の御供にも洩たれば
 口惜しく思居しに伊集院か逆徒既に一の城戸を攻破り聞の聲矢叫の音
 は精木川の浪高く清水か城の山彦に對へて聞ぬしかば遠矢大音聲を揚
 て三代相恩の主君に向ひ弓引る奴原あ後足な見せそ各我が跡に續けや
 者共進めや兵共と大なる竹竿を提げ持て近づく敵を縦横無碍に薙廻り
 突立たるに臘の七日の月も山端に隠れて聞さし暗し遠矢か一人振廻し
 打立るを乙敵の眼に乙城兵大勢と見なしければ賊徒とも左右あく攻倦
 みて暫し時を移したり賊將頼久馬の鞍壺につも立上り府兵は僅の小勢
 なるに攻落さぬ事の奇怪さよと金城の後口に人を遣し火をかけたれば
 さらでだに烈しき清水の峰の山嵐折節寒風膚を裂て猛火忽ち金殿樓閣
 に燃つきて其光り白晝に異ならず此時に乙防さ戦ふものは十人にも足
 らす今迄大太刀大鏡と見へしは遠矢一人か撃き廻り突立し大竿の末よ
 り本まで散々に打破て態の様になりたるなり遠矢も力竭て打死す生涯

不遇にして妻子もなければ其跡誰とも知れざるこそ口惜しけれ金城は
 片時の煙と燃上りて扱早馬を打て伊集院か謀叛の事を翌八日朝早く吉
 田の御陣營に申上たれば義天公聞召し自ら微運の程も知られぬ爰にて
 我身の上をも計ふへけれ共鹿兒島に残し置し親類一族の行末も覺束な
 し扱道路とても嘸皆敵にてあらんずらん一人なりとも當の敵打亡して
 深く討死し給はんとて早御馬に召して駈出給ふ吉田清正蒲生清寛御馬
 の口よ取すかり勿躰なしと扣留め奉りて申けるは箇様の時に當所に御
 渡り在しこそ却て幸にて候へ縦ひ我々無勢ありとも吉田蒲生の者共を
 召集め候は、二三百人乙候半且乙鹿兒島の様をも一先聞召て御進發候
 ひて晩からしと申止奉りけれとも公敢て肯し給はす兩人か申處理に乙
 候得共兵の習は神速をこそ貴ぶなれ今予此處に猶豫すと披露せば賊徒
 彌勝に乗り予か屋形に入代り妻子親類共に恥見せんは口惜かるべし唯
 一人なりとも鹿兒島に立歸り故殿の屋形の跡にて腹切らんこそ本望な
 れ各は思案ありて左右も候へと仰ける蒲生清寛之を承て聞もあへず争

でか仰に負さ候へさあらば某か所領をも打捨て一子にて候三郎太郎
 も同じく召具して給はるべし何處までも御供申さんどぞ申ける吉田清
 正も之を聞て我もさこそ候はんとて皆々馬に打乗く其勢僅か廿三騎
 公の御供と合て五拾餘騎皆死を善道に守り心を金鉄に誓て吉田宮浦の
 宮掖にて御旗の手をさつと擧て小高き丘に打登りて向ふを遙に望み給
 ふ處に放下師一人鞠を網に裏み篠竹を腰に挿たるか参り會ふたり先陣
 の兵立向て何地より來るか云へは鹿兒島よりと答ふ鹿兒島の形勢と
 尋れぬ鹿兒島に之東福寺の古城を北原三郎太郎殿取擣られ麓の御衆を
 初として他下の町人共手にく棒扱股竹鎗などを持かつき其勢五六
 十人計も馳續きて籠城いたし其外他下の侍町の者共追々必死になりて
 防戦ひ候ひし程に伊集院勢は左右なく狼藉得仕らす又北原殿より早船
 を下大隅に漕渡し急を告られたれば頓て援兵共追々に馳來候らんされ
 は伊集院殿之一先百騎計にて小野原良に引れて陣取て候也といと細や
 かに申上けれと諸人も之を聞き彌勇み進で打せける後々に至る迄公此

放下師か事を思召され不便の者なり何地の者なりけんと尋ね給へ共終
 に其搜跡を知らざりしとかや是併なから宗廟諏訪大明神の御方の兵を
 奨んための冥助とぞ申合ける斯る處に小山田範清兄比志島河内守義勝
 か名代として陣前に馳参す公御覽して範清か是迄迎へ來る條返す々々
 も神妙に覺ゆるなり然とも當手の運も今日をかぎりと思ふなれ各予
 か陣に従ひて又半ならぬ青年の命を早く失ひてんは痛はし各は勢ひ
 強き伊集院に荷擔して末久しう後榮を期せよがしと宣へば範清聞くも
 あへす馬より飛下り様帯たる太刀を抜て燒芝を刺と二三度軍神に誓て
 曰士の君に疑はるゝは耻辱の第一なり此度臣等か身の上は偏に我君に
 任を奉る此誓を背く者は忽ち神罰冥罰を蒙るべしといひも敢す又馬に
 打乗り鎗を揮て先陣に進み行く又爰に跡を顧み給へば蒲生の在家には
 伊集院に與せし帖佐の平山某押寄て一字も殘らず燒拂ふ公は鹿兒島の
 生殺坂を下りて松尾坂に懸り給へは敵はこや地下町の者共に追拂はれ
 て御手に立程の者一人も見へす東福寺の古城に之俄の事なれば塙垣な

んと結び搦ふ隙もなく彼處の樹の間此處の岩蔭に木の枝竹の箵を刺立て佐多川上の一族太守美作長野北原某侍殿原地下町の者共君の御親族を守護し奉りて取籠たるに凡地下とて清水城地の町を云ふ則今の上町なり當時迄下町なし公松尾坂より御旗を深山原に吹靡かせ龍の雲を得虎の嶋を負ふ御勢を迎へ見て競ひ勇んで御馬の前に馳參る公斜ならず御感悦あり是偏に各か忠功の致す處神明未だ當家を棄給とさるところを覺ゆるなれとて乃ち諏訪大明神を參拜なされ夫より清水城に打上りて見給へはさしもに大廈高堂を并べ軒を連ねし結構も一時の焦土と燒残りけるこそ淺ましけれ又楠木川と惣門口との間合戦ありし跡に之敵味方の屍骸算を亂して更に憐を催さる又東福寺城へ上りて前の海を御覽あるに小船數艘浪穂を押切て漕來るあり此廻今の福山市成下大隅向島邊より御加勢として援來る者共なり城中よりも狼烟を擧て御方の在所を知らせければ舟々よりは之を見て皆濱崎へ漕附て東福寺城に馳登る去程に御勢既に上下三百餘騎にそ及びけれ爰に又人數百人許馬烟

を立て馳來るあり城上より之を見て敵か御方か又帖佐平山黨か伊集院を助けてや寄せ來るらんと怪み見る所に法師武者一騎先陣に走參り高らかに呼はりて清敷殿にて候なりと申すも果ぬに副田左馬助副田は入來の支流參謁して申様父彈正少弼重長と先立て菱刈郡に出陣し候ひぬ兄にて候者參るべく候得共負薪の疾に侵され嚴寒の歩行に惱み先づ某をば參らせて候也と申ければ公その速に馳參する條尤神妙ありと副田か忠志を御感あり御方の勢は次第に馳加りければ十二月十二日伊集院頼久か原良の陣を攻給ふ相從ふ人々には河田右衛門尉小山田伊賀丞範清前田又四郎範國を始として上町地下の者迄上下五百餘人印色四郎か坂の敵を攻給ひ坂の上より聞の聲を作りかけ雨霰の一群しぐるゝが如く矢束早く散々に射下して敵陣色めき立を地下の者共餘すあ泄すあ打取れと透さす棒鎗にて敲き立て原良の田間迄息をも休す逐却け是處にて互に入亂れ太刀を捨て組もわり刺違て墜るもわり敵御方の旗幟東西に靡き合ひ南北に馳せ違ひ喚き叫んで攻戦へは伊集院方には

一族門貫彌五郎日置肥前守弟孫太郎町田の支族土佐守直久と屈竟の兵ども枕を並べて討死す御方の中奈良八郎二郎と聞えしは奈良四郎左衛門の尉宗成が弟にて地下の者の先登に前て伊集院の一族大田三郎四郎と引組て揉合ける大田か力や勝りけん奈良遂に組伏られ既に首を撃んとする處に兄の宗成馳續て上なる大田か艸摺取て引揚げ口一刺に刺殺せし弟の八郎二郎は猶も太刀を揮廻して敵中に走入當るを幸に斬て廻りけるに益山入道は頼久か一手の大將となり軍を下知して馳來るを眞逆様に引落して取て押へて刺んとするを敵おり重りて多勢か爲に討れたり今日奈良兄弟か舉動比類なしと感せぬ者こそなかりける伊集院頼久は我手の士卒或は討れ或は深手を負て一陣既に破れたれ之殘黨固より全からず況や頼久舐糠の心を挟みて社稷を篡ひまつらんと巧みしかは天人も憤りを含み御方は御太將を親とも守り奉り必死を究て戦ひし程に頼久忽に敗北して原良の陣に引籠籠中の鳥の如く遁るべき道絶たれは既に自殺に及んとす去るを吉田若狹守蒲生美濃守義天公に申上

て頼久か一命計は御助給はれと頼に嘆き奉る公伊集院は代々御當家に負きまゐらせて不臣の企一度ならずの宿敵なれば今度渠か餘黨まで極め誅して累年の憤を散すべきやと宣ひ出さる然るを兩人重て御詫申て今度某等か涯分の御奉公に思召かへて渠か命計を救ひ給れかし伊集院年比日比の強勢今日一日に滅亡せまこと只事にあらず偏に神明佛陀彼か不逞を罰し給ふところ覺へて候得者行末とても渠か徒縦ひ再ひ逆威を振ひ候とて争か諸人も思ひ付候べきと辭を盡して愁ひ訴へけるにそ公も兩人か今日の勳功に申かゆるに於ては頼久か一命をば御救ひ給るべしと御許容あり是より頼久をば伊集院の様に送り歸して蟄居させられつゝ暫しは世上も平均にて干戈の喧響止てけり義天公御凱陣座在し今度の合戦に軍功を抽でたる輩に各御威狀を賜りて褒美せられし中に奈良原四郎左衛門宗成か子孫今は上柳町に住居せし鮫島某か家に公御一見狀を格護しぬ其狀に曰

伊集院彈正頼久以下之凶徒等今月十二日催數多軍勢一押寄

鹿兒島及綏定候之間爲退治御大將御發向間引負一族以下
最前馳參御方於院內原之城令合戰抽軍忠條大將御見知上
吉田伊豆守蒲生美濃守令見知畢其後鹿兒島可致警固之旨
被仰下之間數日令在陣之條軍忠云警固云給御判爲備後證
粗言上如件

應永廿年十二月廿日

藤原宗成
承舉御花押

○栗野磨欲踊

關白羽柴秀吉公の行狀は皆天縱の才智後人力て致すべからず夫朝鮮を
伐て皇國威稜を絶域に震はれしは誠に一世の雄にして其量の大なるは
漢高祖に勝れること遠し世に不出非常の人必ず其本生父の詳ならぬぞ
多かる之其跡を神にせまく物せるもわり秀吉公も出世區々にして其父
審ならずざるを武要拾最てふ書に曰馬島明眼院之後奈良天皇の時醫師
なり此天皇の御眼病を療治し速に平復を得給ひしかば叙威の餘り宮女

を明眼院に賜り其か名をも明眼と宣旨せられたり此宮女天子の幸を受
て懐胎なり然に明眼は清僧の戒を守りて妻を有たす此宮女を尾州愛智
郡中村の住人筑阿彌と云ふ知音に與ふ遂に筑阿彌方にて宮女の産たる
之即ち秀吉なり故に世に之王氏など言ひならせり一説には筑阿彌か
妻懷中に日輸入ると夢みて孕み誕生ありし故童名を日吉丸と号すとわ
るも天子の御種を宿せしとの事をいひあせるにや一説には織田信長の
足輕木下彌助と云もの子なりとあり然共秀吉の信長に仕へられし次
第を見るに木下彌助を父とせば初より織田氏の家臣なるべき事あり又
秀吉治世の後父の厝として中村になく又墓所もあし秀吉の父愷ならば訖
と位牌なども取立らるべきに其事も聞えず何れにも筑阿彌之實父にあ
らざりしを己も知り給ひしなるべしと見へたり秀吉既に六十州を囊括
して威風四海を偃すの餘り自ら明王たらん事を欲して忽ち朝鮮征伐を
そ企られける今年文錄元年壬辰義弘公久保公は隅州栗野城に座在ける
を秀吉公出て住名護屋躬行調度義弘公御父子にも速に御出陣あるべ

き由軍令を傳へられける程に両君は二月廿八日栗野城を首途座在し拷
 突新羅國へぞ御進發ある抑新羅國は昔神功皇后之御時始めて御征伐の
 將は女人なりと見侮らんは口惜かるべしとて棟梁の臣武内宿禰をして
 鬼面の御冑を製らしめて狄どもを怖させ給ひ御供奉の從軍も皆鬼頭貌
 首の冑類當を戴き蔽りたれば新羅の狄どもを始とし其か乗たる馬ども
 迄恐駭きつゝ一支も支す降参して永く西藩の臣と稱し年々に八十艘の
 貢物を上りける去れど其軍の次第著したる魏志にも神功皇后の御事を
 以て鬼道迷衆なども記し置けらし皇后の召されし御冑とて今も豊後の
 英彦山に奉藏せしを見るに大なる立鳥帽子小鬼の面を製り込られたり
 さればぞ踊おとに前導せる者の鬼面被れるを呼て先鬼など稱へるも古
 き世の遺風にや出けん皇后の愆慮を回されし妙計こそいみしく勝れ侍
 りける是より皇國の甲冑之外國の製作に異ありとぞ申ける此事如何に
 やと半ば疑ひ居しに秀吉公朝鮮を伐給ひし軍の事を明人記したる書に

倭衆多戴鬼頭獅面官馬見之驚退と書り是にて正しく我國の甲冑は自

ら五方の製に勝れたる事を信したり是全く武内宿禰皇靈の勅を受けて作
 り始めたる神武妙策吾人仰ひても其遺徳を貴ぶべし去程に義弘公御父
 子御出陣の勢を催されけれども栗野に在合ふ御供の人々と申へ僅か廿
 三騎を揃ひける夢にだに見ぬ西土に御出馬座在に廿三騎のみを揃ひつ
 る事御心細さも想ひやるべし況や比年以來龍伯公を始め奉り數多の人
 々上京の御費目打續き上方の御借財過分に及びし上此度義弘公征韓の
 役に赴かせ給ふには京都の御舊借を償ひ給はざれば唐人の御支度も調
 ひ難く人々も出陣の用意に事を欠きたる折節なれば彼と云ひ此と云ひ
 一方ならず御心を苦しめ給ひけん御事共之筆にも詞にも述べ難く加之
 久保君の御婦人達を始め早々人質として上洛あるべし龍伯公も急き名
 護屋へ御到着なさるべき由引も切らさる秀吉よりの催促最中にて上を
 下へと諸人片唾を飲て安き心ぞあかりける況して神功皇后の時は新羅
 國近津隣國をこそ征し給ふなれ此度之音にのみ聞く遠き唐國迄伐給ふ

事なれば誰かは一人生て再び歸るべしと思ふべき今日を限りの軍の出立親兄弟妻子にも此世に永き訣の名残いふも更なるべしされば義弘公の朝鮮より御夫人宰松君へ參らせ給ふ御文に我等か儀之不申及子供の爲に候間夫の格護故わしを立候はぬ様に候は、我等か無跡に縦令一万部の經を讀みて手向候半よりも嬉しかるべしと遊ばされたり奴か類ひ迄も此文の詞を讀候ひては坐に涙汲む計に感慨今更に極りなし公の御齡も六十餘りに及び給ふて扱其御文書て還し贈られけん御心の中こそ返くも御いとをしと申も愚なり況や當時の御夫人姫君を始め奉り跡に残りたる人々之新田霧島正八幡赤どの大社名神は申にや及ふ祈願所の佛寺にも我君の千世ませと御武運を祝奉り願文を捧けられて戰場の御勝利を祈られすといふ事なし然るに公固より海納の英寛猛を節にして數々戰場に臨み軍事を曉暢して天下の人情に通達し給らずば大敵を見て畏れ給はず小敵を見て侮り給はず是日栗野の宗廟正八幡宮にて啓行の御儀式を執行とせ給ひ爰に候ひける輩に磨欲踊を興行して諸軍の

心を嘆しめ名残を惜み奉る人々を慰め給ひけり折しも如月の空寒起りて霰雪の降り積りけれと

野も山も皆しろたねと成にけり心の宿はかり栗野里

と即興を詠し給ひける此一首の御歌に諸人一入の銳氣を起し勇み進て御出陣の御供し三月上旬にて大口を御進發ありて肥前唐津にそ押渡り給ひける

薩摩錦畢

明治二十六年五月廿七日印刷
同 年六月十五日發行

定價金拾八錢

版權所有

編輯兼
發行者

鹿兒島縣士族

蒲生清隆

鹿兒島縣薩摩國鹿兒島市
清水馬場町三十番戶壹號

印刷者

前野茂久次

大阪市東區和泉町二丁目
八番屋敷

發賣書肆

吉田幸兵衛

鹿兒島縣薩摩國鹿兒島市
中町四十六番戶

發賣書肆

全支店

薩摩郡川內向田町

2

3

